

# 統一

第四百五十五號

目次	
編輯	成島泰行
佛教の統一	梶木日種
佛の御心	本多日生
本尊に關する重要教育	本多日生
信仰上の快樂	原田容廣
護國章講義	坂本一桓
財團勸業實地談	彌勒道人
集社と道義の發展に	青村
雜報	青村
教學財團覽報	

我並に我弟子諸難ありとも疑ふ心なくば自然に佛界に至るべし、天の加護なき事を疑はざれば、現世の安穩ならざる事を歎かざれど、我弟子に朝夕教へしかども疑をわけてしめて皆すてけん、つたなき者のならひには約東せし事をまことの時は忘るゝなるべし、妻子を不便とれもふゆへ現身にわかれん事をなげくらん、多生曠劫にしたしみし妻子には心とはなれしか、佛道のためにはなれしか、いつも同じわかれなるべし、我れ法華經の信心を破らずして靈山にまいりて還つてみちびけかし

懺悔 (其二)

成島泰行

一、發心篇

(4) 信徒は信徒らしくせよ  
信徒とは如何なるものを申すのであるか、是吾人が喋々するまでもなく全智全能の神ゴットを信するものはヤンの信徒で、コーランの經典に依り偶像を拜しオーマイテイ即ち宇宙唯一の神を信するものは回々教の信徒である、然るに吾宗信徒の現狀は如何なるものでありませうか、價値もなき木石神佛を無闇矢鱈に拜みまわるのは……諸君こゝ一番奮起して考究すべき問題ではありませんか、平素信徒が申しますのには、僧侶が彼是いはなくても信心するのは何を對象とするも此方の勝手であると申すものがあります、成程信仰主体論とか申す方から考へましたなら、左様な決論になるかもしれませんが、何に致せ諸君は法華の信徒になるのには何を信じてなつたの事ありますか、又何故に

大説教の全系統

一、發心篇	1 總要	2 感應的發心	3 實在的發心	4 神秘的發心	5 道義的發心	6 推理的發心
二、教相篇	1 總要	2 内外對	3 權實對	4 絕對列	5 佛對列	6 佛對列
三、佛陀篇	1 總要	2 佛陀	3 佛陀	4 佛陀	5 佛陀	6 佛陀
四、教法篇	1 總要	2 教法	3 教法	4 教法	5 教法	6 教法
五、人身篇	1 總要	2 人身	3 人身	4 人身	5 人身	6 人身
六、法界篇	1 總要	2 法界	3 法界	4 法界	5 法界	6 法界
七、本尊篇	1 總要	2 本尊	3 本尊	4 本尊	5 本尊	6 本尊
八、行法篇	1 總要	2 行法	3 行法	4 行法	5 行法	6 行法
九、得益篇	1 總要	2 得益	3 得益	4 得益	5 得益	6 得益
十、批爭篇	1 總要	2 批爭	3 批爭	4 批爭	5 批爭	6 批爭
十一、警策篇	1 總要	2 警策	3 警策	4 警策	5 警策	6 警策
十二、訓育篇	1 總要	2 訓育	3 訓育	4 訓育	5 訓育	6 訓育
十三、祖傳篇	1 總要	2 祖傳	3 祖傳	4 祖傳	5 祖傳	6 祖傳

莊宏偉大なる堂塔を造立へたのでありますか、是申すまでもなく尊無過上なる法華經を信じたから、其法恩に酬んとして信徒となり堂塔を造營したものである、所が時日年代を経るに従つて、深重なる諸君の信仰心も山谷より進出する水と同じく、最初は清冽で一盃の濁りもなかつたが、漸く河に入り黄泥の色を生ずるが如く、今日に至り不知不識の間に、雑多なる迷信物を加ふにいたりしものと思ふ、然れども此に諸君に注意せんければならぬものがある、それは何にかと申せば名望高く世事に老け詭辨を弄する所の街佛者、即ち獅子身虫がありまして諸君を誑惑するものである、其街佛者は如何なる説を立るかといふに、佛陀の教法は皆衆生の機根に應じて説いたものであるから差別はない、古歌に

わけのばる籠の道は多けれど  
あなしたかねの月をみるかな  
山に登る道は澤山あるけれども、月を觀んとする心は同じである、佛陀の教法は八萬四千といつて、恰も太

平洋を望むが如く、浩漭無窮なりと雖、均しく是れ成佛往生せしむるの要道である、決して相違のあるべきものでないとか、或は法華經は難行道にして末法下劣の衆生には適せず、易行道たる彌陀他力の稱名念佛こそ相應なれ等と説き、如何にも其説明が平易巧妙で娼婦の甘言を弄するが如くチヨツと素人受がするが、今之を例せば昔陳の國に張楷仲楷といふ二人兄弟があつた、そして言も容姿も同じで、或時兄上の妻が化粧をしてゐた、弟の仲楷窓下を通る、兄上の妻呼入れて云く、今日の化粧是が否かと、弟の仲楷云く吾は兄上にあらずといへば、兄の妻赤面して走る、而して仲楷は母の室に至る、兄上の妻又後より來りて仲楷によりかゝりて先刻兄上と見誤りて弟の仲楷にしかく、いふて恥を抱けりと語る、仲楷大に笑ひ、復吾は兄上にあらずと云ふたとがある、それと同一く佛陀の教法は權實二教の差別あるも普通の學術眼から見ると、如何にも街佛一派の説は一寸兄弟の言語容姿の異らざるが如く思わるゝも、兄は兄たり、弟は弟たり、嫂は嫂たり、

信心は聽法を因とし聽法は信心を因とす

(優婆塞戒經)

諸君は平素お寺に説教演説があつても、至信に任して法義の如何を聽聞せんと欲するの念薄く、やれあの人態度がよいのわるいの、やれ發音がどうの手振りがどうのと、全て僧侶の説教演説を聞いても信念を涵養せんと念なく、唯講談師や俳優でも見に来たつもりでゐる、それは甚だ不心得の處置だ、信心を培ふには法を聽なければならぬ、法を聽んとするには信心がなくしては到底出来るものではありません、故に信心と聽法とは車の兩輪、鳥の雙翼の如に心得て、信心をするのは勝手だなど、申して 彼是批評や譏謗などする餘暇がありましたなら、れ題目を唱へて從順に法華の教訓を守り、街佛者等に誑惑せられ、邪路に這入らぬ様に致して、不動不退の信心を抽づるこそ信徒の本分でありませぬ、古歌に

信心はたいすじの丸木橋

よろ目をすればあやうかりけり

若も弟の妻たりとせんか、是なか／＼容易ならぬ問題である、故に佛陀は吾が滅後には街佛者が出て、種々の妄説を吐くから、それを破せんが爲に涅槃經に一の金末法の時代になると經文に依らず、自分勝手に理窟を拵らへて清淨なる信佛者を迷はすから、總て經典に依りて經の勝劣理の淺深を判せよ、決して人師の法説に依るなど申すとである、今經文に依りて一代佛敎を判するに、無量義經に云く

成道已來四十餘年には未だ眞實を顯さず法華始て眞實を顯す

とある此經文に依て考ふるに、涅槃經には「一代五十年」とあるから、佛陀の經典は何れが眞實不眞實であるかといへば、四十餘年即ち四十二年は不眞實で、後の八ヶ年の所說法華經こそ眞實であるとは、快刀を以て亂麻を斷つが如く明了である、て幸にも諸君は如此公明正大なる法華經を信じてゐながら、諸種の迷信におちいるとは實になさげなき次第ではありませんか

(5) 確實なる本尊を信仰すべし

野蠻時代の宗教はいざしらず、文明的宗教に於ては本尊を確定するが比較宗教學上第一の要諦であります然るに吾宗信徒は世界統一の大權は法華經だ、吾本尊だと平素申して来りませすけれども、その實自己達の本尊に對する信念は如何なるものでありませうか、實にお話になつたものではなからふかと思ふ、先づ自分の見聞した丈のありさまを一寸列記して見やう

- (1) 宗祖に位牌ばかりで祖師の合掌には嵩蓋の花の簪がさしてあつて煤古た蝶の止つてゐるものもある
- (2) 本尊がなくして不動尊や天理王の尊や鬼子母神などが種々同居して全然骨董屋見体なのもある
- (3) 本尊と宗祖とを合祀してあるのは未だ好いか宗祖の厨子の上には目薬箱や薬袋をのせてある
- (4) 彼方に三峰の野干があるかと思へば此方には虚空藏菩薩の像がかけてある、まるで表装屋見体なのもある

(5) 佛壇は朝夕吾等の信仰すべき尤も清淨なる聖境で

ある然るにその中には櫛箱や椽甚しきに至りてはランブの置處

如此方面を一々舉來つたなら到底その煩に堪え  
されるものでないから、此位にして置て……ソコデ  
吾宗信徒は何を平素佛壇に勧請すべきものであるか、  
これ申す迄もなく日蓮上人が文永十年七月八日佐渡御  
流罪の時、一の谷に於て御圖顯なされたる始顯の大曼  
茶羅がろれてあります、此曼茶羅即ち本尊に就て古來  
から種々の説もあるが、本宗に於ては佐渡始顯入法一  
体生佛不二の十界の大曼茶羅と確定してあるものであり  
ますから、諸君が信仰の標的について彼是心配をする  
必要はありません、日蓮上人云く

正像には未だこの本尊ましまさず(観心本尊抄)

正法千年像法千年にも此本尊は顯れない、故に龍樹天  
親天台傳教等の先師達も、これを親り拜する事が出来  
なかつた、幸にも本化上行菩薩の再誕たる日蓮上人か  
「屬于一人」の教勅に依り末法に入て一百七十一年、日  
本國は東海長狹の郡小湊の浦に應現せられ、千光山清

ラも口がかゝつた、兩親は撰擇してゐるにもかゝらわ  
ず、面倒臭いといふので自分の思ふまゝ娘はある男と  
夫婦になつた、それでやう／＼吾目的達せりといふて  
喜悅つてゐると、男は放蕩をしまして酒色に耽るやう  
樽酒をうつやら、著にも棒にもかゝらず、トドの結局  
自分は娼妓に賣れて浮竹川の身となり、後悔をせしも  
モ一六日の菖蒲十日の菊、それと同じく信徒となるに  
は彼の娘が先方の男の品行徳操家柄等をも檢せずに行  
て後悔せし如くではならぬ、能く本尊の善惡邪正を糾  
明してかゝらなければなりません、故に價値もなき種  
々の物体を猥りに信仰しても骨折損の足勞もうけて何  
の利益のあるものではありません、眞に利益を得んと  
思はば、是非共完全圓滿なる本尊を撰擇せんければな  
らぬ、その本尊とは何である、これ阿彌陀佛でもなく  
大日如來でもなく不動尊でもなく、藥師如來觀音菩薩  
でもなく鬼子母子や帝釋でもなく野干でもなく木でも  
石でもない、これ日蓮上人が

釋迦多寶十方三世諸佛の御本尊法華行者の正意な

澄寺に祝髮して已來、東走西馳幾多の巨難刑戮を冒し  
て而して后觀心本尊抄を御著述なされ、一間浮提第一  
の本尊を吾等に拜跪せしむるに至りましたのは、三千  
年に一度華咲く優曇華を見しよりもめづらしく生盲の  
目あき父母等を見しよりもうれしく、強敵にとられた  
るものゝゆるされて妻子を見るよりも難有さものであ  
る、然るに如上の如きありさまなりとせんか、上佛祖  
宗祖に對し、下法華經を信ずる吾等信徒として甚だ畏  
懼すべき所爲ではありませんか、況んや末法に入  
りては

教主釋尊より大事の日蓮

上人が佛勅を奉じて奠定せられたる大本尊、即ち大信  
標を等閑に附すると申すに至りましては、その罪輕か  
らざるのみならず信徒の魂魄たる本尊を信じないでは  
信徒の資格なしといふも過言ではなからう、第一信徒  
が宗教を信じますのは恰度娘が嫁にゆく様なものであ  
る、昔某處に一人の娘があつた、而して日増に縹緲  
も好くなり嫁に歸く年頃になつた、ソチカラもコチカ

(本尊問答抄)

と被仰た南無妙法蓮華經の本尊にして先程申上たる佐  
渡始顯の本尊でありますこの本尊を信じてこそ始めて世  
界統一も人類救済も洪大なる利益も出るとが出来る所  
かそを確實に信仰もせず耶蘇が何うの念佛が何うのと  
申しましても決して完全なる佛陀の使命を果すとは出  
來なからうと思ふ先づ第一に對外策を講ずるに當りま  
して對内策を講せんければならぬ慈那明了つたとか行  
れぬやうでは詮方がない

日蓮が弟子等の中に中々法門しりたりげに候人々

はあしくげに候 (上野抄)

近頃本尊問題が頻りに主張せられて肝心の信仰養成問  
題が緊急なるをあまりに説かぬやうである此本尊問  
題の如きは宗門最高學府の講究討議すべき問題である  
然るに黃吻僧達が未だ宗學の確な素養もないのに先匠  
達の議論を聞嚇つて弘安だ建治だ、やれ人本尊が何う  
の法本尊が何うの人本尊は大日彌陀等の本尊を破せ  
んが爲即ち破邪的であるの法本尊は久遠自證の本法を

顯說せんが爲即ち顯正的である等と善音器的に所對の者を願す半可通の説をなす如此處より信徒もいつか其本分を忘却し魔鬼にみいられて信仰の主体たる本尊も一定しない様になつたかと思ふ怎か聖祖の遺訓を重じて法門の自慢や小僧達の後押をせず一意専念佐渡始顯の本尊に信仰を捧げると申すとが確實なる所爲といふべきである尙木像式繪畫式のともあるが後日陳述するとせん

(6)終講

私がこれまで申上りましたある章の如きは或は東北關西のお方がね笑ひなさる邊もありませう去り乍ら實際ある地方に於ては幾んどそれより、より已上の事實もあるだらうと思ふ怎か信徒も僧も信仰の標的たる根本問題が確定せず亂雑になつてゐるやうでは到底生命ある宗門的活動は出来るものではないから下らぬ利慾的迷信心や情實などに絆累れず佛陀の金藏と聖祖の遺訓とを遵奉し殊にある地方の如きは緇素俱に大に奮勵して互に相悞め相誠飭て三毒的の行爲は總て御本尊の前に

阿含經をばたわひれにも舌の上におかずとちかひ馬鳴菩薩は起信論を作りて小乗を破りたるが如く潔然從來までの權教權宗を正直に打捨て一切の誑惑罪を懺悔して自佗俱に佛陀自證の本法たる法華經に信仰を改めよこれ佛陀の本懷であるこれ教徒の面目であるこれ日本國否世界人類救済の爲である。南無

二 教法篇 權實對

佛教の統一

梶木日種

新年の劈頭に吾が井村法兄が各派統一論を唱道せられたとは實に快心の極みである、惟ふに苟くも信仰あり慈悲あるものならば、誰人も統一の理想が一日も速に實現するとを期待して止まぬであらう、即ち蓮祖門下各派の統一が先決問題として實に第一に當る大事である、これだに遂成すれば佛教各宗の統一は左程の難事ではあるまい、而る後世界幾多の宗教をも統一すると

懺悔してその本分を全し宗門の爲盡力せんことを望みます尙街佛者即ち權宗の人々に申す卿等の中にはそれ相應の智者學者もある爾して常に佛陀の教法は轉迷開悟である衆生の種々の惡事醜行をするのは貪瞋痴即ち三毒の煩惱の致す所であると申しておりませうけれども御自分方は如何でありませうか佛陀の教法は先程申上て置ました如く法華經であるといふとは百も二百も知てゐる然るに惡習の煩惱去り難くたまに良い仕事を遣るかと思へば彌陀中心の統一論や觀經法華同時說や法華の眞實など、實に片腹痛さ次第である士の尤も尊むべきは節操である彼の佐藤一齊は近世の學者であつたけれども自己の本意でない朱子學を徳川の權威に畏怖れて表面に唱へ陽明學を裏面に隱然學んだ後世彼はその卑屈の精神を無節操似非學者と罵倒されてゐる卿等も定めて此懺悔文を披閱するであらう就ては無節操似非學者並に佛祖違背の者と後世いはれぬやうに御自身先づ第一に轉迷開悟して彼世親菩薩馬鳴菩薩の小を以て大を破せし罪を懺悔せん爲に世親菩薩は佛說なれども

が能る、吾人の前途は誠に多望である、決して一日片時も安閑として空過するを免さない、宗門の志士たるもの競ふて統一の大業に勵み、佛祖の聖慮を安め奉らねばならぬ

然るに現今の世間を見渡せば、佛教の分裂してある状態を認めて却てそれが佛教の特長であるかの如く誤解して居るものが多い、現に我國の佛教は吾が蓮祖門下の九教團を別に見ても尙ほ三四十に分裂して居る、即ち天台宗は三派に別れ、眞言宗が七派、禪は臨濟が十派と曹洞、黃檗の二宗があり、念佛では淨土宗が二派、眞宗十派、時宗、融通念佛宗があり、この外に法相、華嚴、眞言律、律等は一時は衰へ減んだものが再興されたもので、總計が四十になる、十把一束として四十派が四束になる、この四束が各自主義主張を異にし隨て本尊も一樣でない、實に我國の佛教は不統一極まる多神教の如き觀がある、この現狀を佛教の眞面目だと誤認して毫も怪まないのが抑も我國國民の舊來の思想である、一例を擧ぐれば彼の北畠親房が著した神皇正統

龍四に次の如き説がある

君としては、いづれの宗をも大概しらしめして捨られざらんことを、國家攘夷の御はかりごとなるべき、菩薩大士もつかさどる宗あり、我朝神明もとりわけ擁護したまふをしへあり、一宗に志しある人、餘宗をろしりいやしむ、大きなあやまりなり、人の根機しなくれば、教法も無盡なり、いはんや我信ずる宗をだにあきらめずして、いまだしらざるをしへをそしらんは極めたる罪業にや、われはこの宗に歸すれども、人はまたかの宗にこゝろさず、ともに随分の益あるべし、これみな今生一世の値遇にあらず、國の主ともなり、輔政の人ともなりなば、諸教を捨ず機をもらさずして、得益のひろからんことを、れもひたまふべきなり、云々

彼れ親房の如き識見ありと謂はれた人物ですら、如斯八百屋主義を唱へて居るから、現代の宗教思想の幼稚な多数の國民が太鼓念佛の考を持つのは、寧ろ當然と謂はねばなるまい、如斯國民は恒に

雨霰雪や氷と隔つれど、落れば同じ谷川の水

分け登る麓の途は多けれど、同じ高嶺の月を見る哉などの和歌をば金科玉條だと心得て八百屋主義を誇として居る、即ち雨霰雪や氷の如くに宗派くゞてその形式が變つて隔があるやうに見へるが、融合つて流れ落る先は同じ釜川の水となるのである、高嶺に登る麓の途は幾筋も分れてある如に甲宗乙派と多く岐れてあるが、絶頂に登り結めたならば甲も乙も同一の月を眺めるのである、諸宗各派の形式は變り教義は異つて居ても、根本は一の釋迦如來の宗教であるから結局は皆往生成佛の極致に達するのである、宗派くゞてその手段方法こそ違へ目的は同一である結果は變りがないと澄して居る、これは在俗の獨斷としては固より素人のとであるから誤解も無理はないと怒りもしやうけれど中には僧侶の身であり乍ら如何トボケたものか尙且この八百屋主義を唱へるものがある、これ等は畢竟自己の宗義に暗い故か、但しは世間に阿ねる渡世坊主か、何しる道念の皆無實に佛祖の罪人と謂ねばならぬ、何

故ならば諸宗各派の祖師とか開山とかいはれて苟にも一の宗派を建立する位の人達は、孰れも皆我宗旨に限る、我宗こそ最勝優絶衆生濟度の要道である、他の宗派では決して救濟らないぞと、堅く主張してある、一人として谷川論や高嶺説の如な八百屋主義を唱へては居ないのである(その證據は各宗綱要を見れば明である)

さて如斯いへば八百屋論者は又云ふであらう、それは成程諸宗の開山達は自己の證悟の上から或は研究の上から夫々宗旨を建立するに至つたものであらうから、開祖その人の意見としては自己の主唱する宗旨に限ると主張されるのは當然であらう、併し佛陀は吾人の性質なり根機なりに適應するやうに種々と對機説法遊ばし、吾人の煩惱の病に應じて種々の藥を賦與下されたのであるから、吾人は何れの宗派にしる自己の氣に適つたのを撰んで信用しさへすれば可いではないかと、如斯いふ風に論ずるものである

これは本來對機説法といふとも應病與藥といふとも明

かに了解して居ないから、如斯に誤解僻見を起すのである、先づ應病與藥から話をすれば、佛陀は醫師、教法は良藥、吾人凡夫は病者である、そこで醫師の佛陀が吾人凡夫の病症を診斷になり適當な良藥を賦與下さるとなる、然るに八百屋論の通りにすれば、醫師に診斷を頼まず、藥効の有無も吟味せず、病者自身が手當り次第にヤレ念佛ダ眞言ダ禪ダ律ダと只宗旨でさへあれば、何でも搦はずに矢鱈と信用すればそれで可いといつたやうな話で、例へて見れば恰度縁日に香具師が古嗅い徹の生へた藥劑をキラ／＼した容器に盛れ立派なレツテルでも貼り、これは何某ドクトルの方劑で萬病全治起死回生の妙藥なりと、辯に任せて吹立る効能を眞に受けて、これを服用しさへすれば如何な危篤な病症でも立所に全快するに決して居ると、妄信するやうな話になる、豈と危険な譯ではないか(應病與藥の眞意は後に述べる)次に對機説法の意義を説明せば、佛陀が各人の性質なり根機なり嗜好なり欲求なり各種異様な性欲に應じて種々無量に法を宣説遊ばしたとて

俗にいふ「人を見て法を説く」といふとである、これは隨他意といつて他の意に隨つて説かれた一時假説の方便の教であつて決して佛陀の眞實の御本意ではないその證據は法華經の序分無量義經に説いて曰く善男子、我先に道場菩提樹下にして端坐すると六年にして、阿耨多羅三藐三菩提を成ずるとを得たり、佛眼を以て一切の諸法を觀するに宣説す可らず、所以は何ん、諸の衆生の性欲不同なるを知れり、性欲不同なれば種々に法を説き、種々に法を説くと方便力を以てす、四十餘年には未だ眞實を顯はさず無量無邊不可思議阿僧祇劫を過ぐれども、終に無上菩提を成ずるとを得ず

この經文に據れば、佛陀が最初菩提樹下で三七日間華嚴經の御説法、次に鹿野苑に移り四阿含經を説き給ふと十二年、夫より方等部の諸經が前後十六年、次に般若經十四年、以上四十二年間の説法は衆生の性欲に應じ方便力を以て説き、未だ眞實を顯はしてないから、これ等の諸經を粉骨擗身して無量無邊不可思議阿僧祇

の如に思ひ、腹を撫たものは大鼓の如ぐといひ、尾を撚つたものは掃帚、脚を抱へたものは塗桶に似てをると争ふ、これ皆自己が撫探つた處丈を知つて居るのみて象の全体を辨へないものであると、喻説になつて居る、今の八宗十宗乃至三十四に分裂してある佛敎の諸宗派が、或は念佛に限る、眞言が勝れて居る、イヤ禪々律々と、各自我慢偏執を慕つて居る現狀は、全く群盲撫象のバナラマを見るやうに思はれて誠に可哀心地がする、さればこそ吾が日蓮上人は「日蓮が慈悲廣大ならば南無妙法蓮華經は萬年の外未來までも流布べし、日本國の一切衆生の盲目をひらける功德あり、無間地獄の道をふさぎぬ」と仰せられたので、これ等哀むべき群盲の眼を開いて佛敎の大道を見せてやらうと思召し、念佛無間等の四箇格言を唱道して盛に諸宗を折伏遊ばしたのであるが、彼等は却て上人の慈念を仇に思ひ僻めて數々迫害を加へ奉つたとは、豈と頑迷極まる話ではないか

さては眞實の佛敎とは何ぞや、何が全体佛陀の御本懷

劫修行した處が到底無上菩提を成就するとは叶はないぞよと、この通り明かに佛陀自身に斷言遊ばしてあるして見れば華嚴經に依つて建立した華嚴宗、阿含經に依つて建立した俱舍、成實、律の三宗、方等部の諸經を基として立てた深密經の法相宗、淨土三部經の念佛諸宗大日經等の眞言宗、楞伽經の禪宗、又般若經に基いたた三論宗これ等の諸宗は已に佛陀が未顯眞實方便無得道の教法であるぞと仰せられた四十二年間の經々を依據として建立した宗旨であるから、言ふまでもなく皆悉く方便無得道の宗旨である、然るに何の宗旨でも等同である得道が能ると思ふものは全く盲人も同然である、それ故に佛陀は盲人撫象の喩を説示になつて居る茲に巨大な象が一面繋いてある、これを多の盲人が群集つて手で撫探つて見て後に一處に會合して各自象の評を始める、一の盲人は象は漆で塗つた桶の如なものだといふ、一人はソリでない掃帚の如なものだといふ、ナニ太鼓の胴の如ぐ、イヤ箕の如ぐと、衆くの盲人が互に争つて止まない、これは象の耳を捉へたものは箕

の教法であるかといふに、それこそ佛陀が四十二年經過て後始めて宣説遊ばした所の妙法蓮華經である、即ち法華經に曰く

世尊の法は久うして後、要らず當に眞實を説くべし今正しく是れ其の時なり、決定して大乘を説かん方便力を以ての故に種々の道を示すと雖も、其れ實には佛乘の爲なり

正直に方便を捨て、但だ無上道を説く我が昔の所願の如き今者已に満足しぬ、一切衆生を化して皆佛道に入らしむ(以上方便品)

この經文に據れば、世尊が四十二年の久しき間方便力を以て種々に對機説法遊ばし、一切衆生の根機も調ひ、眞實の佛乘を説くべき時節が今正しく到來した(世人は只對機々々と機根計を曝々するが、佛敎は只機根のみに限らない、説時といつて時を知るとも肝要である、經文に「今正しく是れ其の時なり」とあるを見て知るべし)故に佛陀は今より正直に方便を捨て、但純一無雜に無上道の法華經を説く、我れ成佛した最初より一

日も早く一切衆生にこの法華經を説き聞かせ、我と等しく皆悉く成佛させてやりたいと念つた願望が、今已に満足した、これこそ我が出世の本懐を遂げたりと、大に歡喜遊ばしたのである、それ故に佛陀は法師品に、我が説く所の無量千萬億の諸經の中に於て此の法華經最も第一なり、已に説き了つた華嚴、阿含、方等、般若等の四十二年間の諸經、今説いた無量義經、當に説かんとする涅槃經等、この已今當の三説の中に於て、この法華經が最も難信難解と仰せられ、又「此の法華經は諸佛如來の秘密の藏なり、諸經の中に於て最も其の上になり」と仰せられ（安樂行品第二）藥王品には大海等の十箇の譬を擧げて法華經が最尊無上であると讚嘆遊ばしてある、その經文一二を示さう譬ば一切の川流江河の諸水の中に海これ第一なるが如く、此の法華經も亦復是の如し、諸の如來の所説の經の中に於て最もこれ深大なり又日天子の能く諸の闇を除くが如く、此の經も亦復是の如し、能く一切不善の闇を破す

佛はこれ諸法の王なるが如く、此經も亦復是の如し、諸經の中の王なり（以上錄日）加之釋迦如來がこの法華經を宣説遊ばした時に、東方寶淨世界より多寶如來と申す佛陀が態々この娑婆世界へ來臨遊ばして、妙法華經皆是眞實とて今釋迦如來が説き給ふ法華經は皆是れ眞實であるをよと證明に御立なされ、又十方分身の佛といつて阿彌陀、大日、藥師等の諸佛も皆集り來られ舌を梵天に著けて、釋迦如來の説法が虚妄でないことを證據立られた、斯の如くにして佛陀御在世の一切衆生は悉く法華經に歸依し、統一したる信仰を持つて成佛得脱の大果報を得たのである、即ち一代之五十年間宣説遊ばした八萬聖教を文字として、佛陀の滅後五百年の間は迦葉、阿難等の御弟子に小乘經の樂を以て一切衆生に授けよ、次の五百年の間には文殊彌勒、龍樹天親等の菩薩に華嚴經大日經般若經等の樂を以て一切衆生に授けよ、一千年過ぎて像

法の時代にならば藥王菩薩觀世音菩薩等、法華經の題目を除いて餘の法門の樂を以て一切衆生に授けよ、かくて正像二千年過ぎて後末法の時代に入りたらば、迦葉阿難等文殊彌勒等藥王觀音等に譲られたる所の小乘經權大乘經並に法華經の文字は有りともし衆生の病の樂にはならず、所謂一切衆生の病は重くなり、これ等の教法の樂は淺くして効能を失ふ、その時には法華經涌出品の時に大地の底より上行菩薩と申す釋尊の久遠の御弟子を御召出になり、多寶佛十方の諸佛の御前に於て、釋迦如來が七寶の塔の中に於て妙法蓮華經の五字をこの上行菩薩に譲り給ひ、末法に出て、是好良藥を一閻浮提の一切衆生に授けよと嚴命になつたのである、されば末法の今日に在つては我等一切衆生の難病痼疾を癒すべき良藥としては、只法華經の題目南無妙法蓮華經の五字七字に限るべしと、佛陀が豫て確定になつて居る、これが應病與藥の眞意である、斯の如く佛陀の眞意、佛教の歸趣は、開顯統一の妙法に結着するのである、それ故に佛敎統一の理想は一度

像法時代に於て實現された、我國平安朝時代に於て述門法華經に依つて日本傳來の佛敎諸宗が統一されたのである、その事實は人皇五十代桓武天皇の御宇延暦二十一年正月十九日高雄寺に於て、天皇が行幸になり、南都六宗七大寺の碩德善議、勝猷、奉基、寵忍、賢玉、安福、勤操、修圓、慈語、玄耀、歲光、道證、光證、觀敏等十四人を上首として二百餘人の貴僧高僧と、天台法華宗の最澄法師（根本傳教大師）とを召合せられて宗論を催された、その時最澄上人は三論の二藏三轉法輪、法相の三時五性各別、華嚴の四教根本枝末六相十支等、總じて諸宗の大綱を破り、天台の一宗こそ最極最頂の宗旨なれと論じられた、諸宗の僧綱大に蹶つて上人を邪見だと謗つたが、上人は一々本經本論並に諸經諸論を立證して諸宗の邪義を破られたから、諸徳遂に舌を卷き頭を傾け手を又へ我慢の轡を倒して一同天台宗の立義に歸伏した、その時天皇大に驚き給ひ同二十九日に和氣弘世と國道の兩人を勅使として、重ねて六宗七大寺に宗論の命令を下されたが、彼等七大寺

の碩徳は連書した歸伏狀を認めて朝廷に捧呈した、その本文（原漢文）を掲げやう

漢明の年、教震旦に被り、磔嶋の代訓本朝に及べる也。聖徳皇子は靈山の聖衆、衛岳の後身、經を西隣に請めて道を東域に弘め給ひ、智者禪師は亦共に靈山に侍して迹を台岳に降し、法華三昧を悟て以て諸佛の妙旨を演べられ也、竊に天台の玄疏を見れば、總じて釋迦一代の教を括つて悉く其趣を顯はすに通せざる所なく、獨り諸宗に逾々殊に一道を示す、其中の所説甚深の妙理なり、七箇の大寺六宗の學生昔より未だ聞かざる所未だ見ざる所なり、三論法相久年の譯漢焉として冰のどく釋け、照然として既に明かなると猶ほ雲霧を披いて三光を見るが如し矣、聖徳の弘化より以降于今二百餘年の間講ずる所の經論其數多矣、彼此理を争へども其疑未だ解けず、而るに此の最妙の圓宗猶ほ未だ闡揚せざりしは、蓋し以て此間の群生未だ圓味に應はざりし歟、伏して惟みれば聖朝久しく如來の付を受け深く純圓の機を結ばる、

一妙の義理始めて乃ち與顯し六宗の學者初めて至極を悟りぬ、謂つ可し此界の含靈而今而後悉く妙正圓の船に載せ早く彼岸に濟すとを得んと、譬へば猶ほ如來成道四十年の後乃ち法華を説き悉く三乘の侶をして共に一乘の車に駕せしめ給へるが如し、乃至善議等牽れて休運に逢ひ乃し奇詞を聞しぬ深期に非ざるよりは何ぞ聖世に託せん哉、慶躍の至に任へず敢て表を奉り陳謝以聞す、輕しく威嚴を犯し伏して戰慄を増すのみ

斯の如く當時我國に渡れる三論、法相、華嚴（以上三宗小乘宗）俱舍、成實、律の六宗の高僧碩徳達が「六宗の學者初めて至極を悟る」と云ひ「慶躍の至に任へず」と云つて悉く天台の連門法華宗に歸伏したから、そこで日本一州擧な天台宗となつたのである

處が傳教大師が入寂の後、空海が眞言宗を始め、禪宗が支那より舶來し、法然房が念佛を唱へ出したから、折角統一された佛敎の解釋意見が復び支離滅裂に紊亂した、佛院が豫て白法隱沒と讖言られたる時代は即ち

三、佛陀篇、慈悲  
佛の御心

本多日生師 講演  
有田宏道 筆受

茲に現れ來つた、時は正しく末法に入り法華本門の妙義が當に廣宣流布すべき時代となつた、さては本化上行菩薩が佛勸を奉じて出現になるべき時である、果然吾が日蓮上人は我國に出現になつた、上人は實に上行菩薩の後身である、仍て佛院より委任されたる佛敎統一の大使命を果たすべく活動せられ、佛敎の滅裂せる解釋意見を審判して統一歸趣の一大斷案を下されたのである、上人は即ち念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊、諸宗無得道、法華獨得の成佛と大聲疾呼して佛海の白浪を平らげ法山の綠林を伐り拂はれた、爾來已に六百五十餘年を経過したが、惜し哉我國國民は宗教思想が幼稚である爲めに、千三百有餘年來佛敎の感化を受け乍ら、今尙ほ佛敎に權實の碩異があるとすら、辨へず、悠々として多神散漫分裂の状態に甘んじ、徒らに迷信を貪りつゝあるのである、これ寔に憂ふべきとてはないか、我が親愛する國民諸君よ、卿等速かに迷信の惰眠より醒めて吾が日蓮上人の敎訓に聞き、佛陀の眞意と佛敎の歸趣とを辨へて、斯の統一的成立宗教の信仰に歸入せられたいものである

本日は佛の御心と云ふ題を以て御話しようと思ふのであるが、先づ序言として少しく述べたいことがある、佛敎徒は佛の御心を渴仰し、其渴仰の心が御佛に同化し、其同化の力が世の中を益する行ひとなつて現はれるのであります、堯舜の心を以て心とする者は、聖賢の徒である、又基督の心を以て心とするものが、基督敎徒である如く、我々佛敎徒は佛の御心を以て我心となさねばならぬ、然るに現下佛敎徒の有様を視るに、その多くは御佛の心に契はない様なことになつて居ると思ふ、それは御佛の慈悲、御佛の智慧、御佛の力用が、余りに高遠絶大なるが爲か、又は教義的感化の衰へた爲か、何れにせよ、正當に會得し感孚して居るものが甚だ少ない様に思はれる、御佛は總てに於て

圓滿なる徳を御有ちなされて居ることであるに、事實に於て佛教徒は意識の上にも、又行動の上にも、うの難有味を實感して居るもの誠に少なく、かくて佛教徒の間に佛の御心が隠れて居るから、實社會より見れば實際上に効果のないことになつて居るのである、さうしても佛の御心を間違なく會得して、日常の間人生社會に適切な効果ある信仰動作を取らねばならぬ、この感慨に打たれて只今この演題を掲げた次第である先づ從來佛教徒の誤解を一言しますれば、小乗教では此世の中は厭ふべきものであるとして、我物があると思ふのはいけない、無我に一致せよ、無我に一致するには、家族を捨て世間を去り、山林に閉ぢこもりて此身を捨て、一日も早く空寂の涅槃界に入らなければならぬと説き、畢竟人生以外の特別の生活に移らなければならぬとの思想が行はれたので、人の世は過去より未來へ通ふる一夜の假りの宿、雨降らば降れ風吹かば吹けと云ふて、自棄して現實の社會を厭ふのである、これは御佛の眞意でないことは誰にも分ること、

思ひます、それから禪宗の教理は甚だ高き様でありますが、能く考へて見れば人生と未來とをば救はなければならぬ宗教が、本來無東西だとか、本來迷悟なしだとか、佛は虚空の如きものであるとか言ふて、絶對の一面にのみ傾いて、虛無濠恬の状態を渴仰して、これが悟道であると思つて居る、本來無東西なんて一寸名が意氣なものだから、まゝ此の宗旨を高遠の教なりと思ふて居る人がありますが、實際深く考へて見れば、絶對の智見としても未だ盡さざる所ある上に、人生社會に何等裨益する所がない、一言以て云はゞ現實の國家社會に交渉を絶つことになつて居る天台は畢竟法華の迹門を表として、佛様を智慧の方から窺ふたので、其渴仰が佛は法界の實相を御悟りなされて居る、我々もこの實相に合一し到達しなければならぬと云ふのである、舍利弗が御佛を渴仰せし状態を考へて御覽なさい、又止觀の修行や法華三昧の行法は如何です、如斯絶對の智慧を渴仰することは、元より高遠であります、余り高遠に過ぎて實際社會と懸

隔の傾きがある、何となれば此智慧行は常識を排して六識已下の智慧と稱し、高遠に馳せましますから、随つて人生の救済には迂遠に流るゝのであります。また淨土宗などには大偏見があります、それは彌陀の四十八願を取りて、久遠實成三徳有縁の大恩教主釋迦牟尼世尊の大悲願を捨つるので、これは有縁の教主を捨て、無縁の佛に頼り、本佛を去て迹佛を信ずるので、道念の根本が破れるのであります、この誤りを知るには釋尊の御心は如何なるものかを知るならば、自らその誤りが分明になると思ふ、故に佛の御心を會得することが根本問題である、佛の御心は智慧に満ち慈悲に満ちて御出でなされるので、結局は智慧一体の慈悲におちつのである、其慈悲はこの人生社會を救済し給ふことと、而して未來永遠の救済とが含まれて居ります、御佛の慈悲海中には吾人の過去も現在も未來も御救ひなさる、御慈悲が間斷なく注がれてあるのです、之を要するに能く世間の苦を救ひ給ふが上に、又未來の樂を與へ給ふことが、佛の御心であります

これより進んで御佛の智慧と慈悲とに就いて少し語りませう、智慧の方面から見ても佛教には長所がある、基督は神が全智能に在すと申しませけれども、佛教を除いた有ゆる宗教對象の智慧は、未だ盡さざる所があります、獨り佛教は天地法界を觀ることも、自己の現在未來を論ずるに就ても、極めて哲學的に眞理を示して居る、御佛の智慧は一切種智と申して、萬有の因果關係をことごとく照知なさつて居ります、同じ愛と云ふも、この大智見を通して來た愛でなければ、その愛は眞實の結果を來たさないものであります、單なる智慧、智慧の缺けたる愛、俱に信頼する價值がありません、大智見と合体して活動して來る大慈悲でなければ、如何なる下根をも救ふと言ふことにはなりません、基督教の愛にせよ、儒教の仁にせよ、尊き教に相違はありませぬが、之を公平に見ますと遠く佛教の智慧一体の大慈悲には及びませぬ、御佛の智慧や慈悲は、眞乎絶對圓滿なものであります、一佛とは何を岩間のこけむし、只慈悲心にしくものはなし、佛心とは慈悲心是

れなりと申して、二六時中慈悲に御満ちなされてあつて、言語も絶へ思慮も及ばぬ算きものと思ひますが、只經典の中に紹介せられてある丈でも、至れり盡せりである、韋提希夫人を救濟せられたことに就ても、彌陀の慈悲と云はんよりも、寧ろ釋迦佛の慈悲と智慧とに感佩せねばなりませぬ、それについてまた考へたらなければならぬことは、天竺に出て玉ひし應身の釋迦佛すら、智慧の結晶体であつて、慈悲の体現者である、況してや本佛の大智慧大慈悲は無限であると思ひ、而して其本佛三輪の妙化に於ける廣大の御徳を渴仰致さねばならぬ

慈悲と智慧との關係を見まするに、迹門には智慧を表とし慈悲を裏にして説いてありますが、本門は智慧を慈悲に捲いて活用されてあります、故に善量品には智者よりも愚者、優者よりも劣者、強者よりも弱者を救ふを本旨となされてある、皆さん既に御承知せう、善量品に醫者と藥と子供との譬を示されたことを、子供が佛を慈悲ある父にして而かも良醫なりと信ずる

たりとも同化致しませれば、その活力はやがて世を救ふ精神となつて現はれ來らずには居りませぬ、子を持つて知る親の恩と申しまして、佛様が難有と申しまして、自ら救濟の爲に活動し苦辛して見なかつたならば、佛の慈悲を感ずることはどうしても薄いのであります、一切衆生の異の苦を受くるは、悉く如來一人の苦なりとの、如來の大慈悲に感孚せられた時日蓮上人は、これに此大慈悲を感受すると同時に、下に向つて一切衆生の一切の苦を受くるは、日蓮一人が苦なりとの、大慈行願の源となつたのであります、其慈悲行や（自長五年四月廿八日）廿八年の間又他事もなく、母の赤子の口に乳を入れんと勵む慈悲なりとの慈訓に見るも、知ることが出來ます、上人は終生慈悲を中堅として、活動もなされ迫害にも打勝たれたので、宗教家の英氣は皆慈悲の根元より發生し來るものであります、龍口刻頸の座に坐し給ひし日蓮上人、寒風凜烈骨に徹る佐渡に流され給ひし日蓮上人、その志念の堅固なりしこと如何ばかりなりしぞ、是皆救濟の慈悲全身に充ちたる

様、また果敢なき吾々凡夫も悟りをひらき得る丈の良薬をのこして置かれたことを、娑婆の人間は聲と文字とを以て、耳と眼よりして救ふより外はない、食物や香より救ふ處もあるが、娑婆世界の機類は聲字の二つである、學校を見ても分る、先生がボードに文字を書き、また話をして、だんく生徒を教育して行くのである、三根最も利にして三根最も鈍なりて、佛の大慈悲は眼耳鼻の三に對して聲字法を應用して、救ひの大教をのこし置かれたのであります、南無妙法蓮華經の文字、南無妙法蓮華經の音聲、其文字なり其言葉なりが、直ちに力をもつて居るのである、これは普通の智識にては一寸分り悪いが、文字即實相、聲即實相です、文字が書物となりて文明は日に月に進歩して行くが様、本佛三輪の妙化より出て、妙法蓮華經の攝化となつて、大なる救ひの力用を有つて居るのであります、御佛の慈悲を渴仰する己上は、必らず本佛の妙化として來れる妙法を信じねばならぬ、この信念渴仰のある所、遂に御佛に同化するに至るのである、少分

の致す所、天台は正在報身と云つて佛の御心を智慧の方に見、日蓮上人は應身論三と申して智慧を慈悲に捲いて大慈悲の佛を教へ給ふた、智慧を鼓吹致しました天台の主張は今や實社會に活力なく、所謂去年の曆の様、御佛の慈悲の力がやがて我々信仰の上に救濟の力となることを示された、日蓮主義は今後大に發展することと思ふ、顯本法華を信するものは、釋尊の因行果徳の二法は成く妙法蓮華經の五字に具足す、吾等此五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り與へ給ふなりてう意識を忘れてはなりません、吾々が御佛を渴仰して南無妙法蓮華經と唱ふるは、其言葉其文字は釋尊の大慈悲力慈善根力功徳力の結晶である、信せざるもの、前には盲人の日光を見ないのと一般であらうが、一度この意識ある信仰に入るならば、釋尊の慈悲の御はたらきを受けて、生きとし生ける此人生社會の總べてが現世も未來も救はるべき信仰となります、此大法は一雨の如し、よく三草二木の蒼生を潤すのである、吾々の救はれを米に譬ふれば單に實が出來ると云

ふのではなく、花も開きて而して實も結ぶが如く、人生五十年七十年の上に世間の樂てう花開き、而して涅槃の樂てう實を結ばしむるのが、御佛の心である、人生の救済は之を華報と云ひ、未來の救済は之を果報と云ふのであります。

くれ／＼も二世を併せ救ふが佛の御心であることを忘れてはなりません、先づ生前を安じて(現實世界)更に没後を助けん(未來永遠)とは、日蓮上人が佛徒の本領を示されたる聖語であります、彼の武士道は現世の教訓として、又死を輕んずる點に於ても、貴き所少からぬと思ふが、然し死後の適當の觀念を缺いて居りますから、未だ完備せる主義とは申されませぬ、されど佛敎各宗に於ても、多くは未來觀の一方に偏して居つたから、佛の御心たる二世救済の實が擧がらなかつたと思ふ、又日本人が神道の神様を敬ふは固より本分であるが、蓋し其神様の本源、宇宙の本林等の説明は、何れも盡さざる所あつて、根底より動搖を免れぬものである。

心の様、圓滿なる救済を理想することが、大切であります。

我は如來兩足尊なり、世間に出づるは猶大雲の如く、一切枯稿の衆生を充潤して、皆苦を離れて安穩の樂、世間の樂及び涅槃の樂を得せしむ(藥草品)  
大雄猛世尊當に世間を安んぜん欲度し給ふ(授記品)  
今此の幼童は皆是れ吾子なり、愛に偏黨なし(譬喻品)  
如來も亦爾なり、諸法の王として忍辱の大力、智慧の寶藏あり大慈悲を以て法の如く世を化す(安樂行品)

## 七、本尊論 1 總要

### 本尊に關する重要教義 (承前)

本多日生師 講述

増田聖道君 速記

## 第二 行門上よりの考察

本尊の研究に就ては、單に本尊その者の本質意義を考察するのみに止めせして、必ず一面には行門上よりの

聖德太子は流石は聖明の君子である、王法佛法の冥合をはかり、篤く三寶に歸依せよとの憲法を定められてある、日本人は更に太子の本迹、觀をも會得せねばならぬ、今の學者今の政治家は、この大事を心得居るものがない様である、要するに吾々日本人は佛敎の眞意を得、釋迦牟尼佛の御心を以て我心として進まねばならぬ、佛の御心の徳より見ますれば、孔孟の徳も、基督の長所も、何れも佛心中に具へられて居ると思ふ、我々佛敎徒は久遠の本佛釋迦牟尼世尊の二世救済の御心を心として、先づ人生社會の救済に向つて、健闘し活動し、又人類死後永遠の正覺を得せしむることに就て、熱誠懇切なる感化を與へ、斯くて二世の救済を完

ふする様、心懸けねばならぬ  
終りに一言す、佛敎徒は佛陀の心を渴仰して、上には二世救済の御慈悲を感受し、下には二世救済の働きを現はさねばならぬ、若しも佛の御心を忘れて我見忘想に陥り、或は未來觀の一面に傾き、又は現世一旦の慈善に偏してはなりません、縱し少分なりとも、佛の御

考察を鮮明にせねばならぬ、それは本尊と信行との關係は極めて密接なるものであつて、本尊上の意義と信行上の意識とは上下一致して函蓋相應せねばならぬ、若しも本尊上に於て教ふる意義と信行上の意識とが上下函蓋相應せぬならば決して適當なる感化を與へ得べきものでない、必ず混沌たる宗義となり活氣なき信仰となつて、純善の信仰、清新なる感化を持続することは出来ぬと思ふ、然るに我宗中古已來の解釋を見ると本尊の説明としては多く觀念系に屬する理論を固執し而して行門上の解釋を見れば單信無解を主張せり、その矛盾の跡知るべきのみ、今日に於てもこの間の着眼すら明かならずして、本尊上の問題を解釋せんとするものなきにあらず、蓋し思はざるの甚しきものと云はねばならぬ

若し行門上に在りて智行を取り觀念を立つるならば、その對象は不可思議境の如き冷靜なるものにて不可なるべきも、苟も信行を取りて歸命せんとすれば、その對象には必ず本尊を要し、而してその本尊は救済

の活力あるものでなければならぬと思ふ、故に本尊の本質意義を講究するには却つて行門上の考察より對照することが大切であつて、又古來の謬見を看破するに於て便宜であらう

佛教行法の概要

遙遠なる歴史を有し活潑なる經論釋書に顯はれたる佛教の行門は、實に千差萬別であつて、殆んどその適從する所那邊にあるかを知るに苦しむ、されど之を遠觀し來るにその間一道の系統脈絡の貫通するものありて時に支離滅裂の如く見ゆる多岐散漫の中に毫も動かす能はざる正統正系ありて存するのであるこの正脈を把持することが行法上の着眼點でありませす

佛教の行法を一言にして言明しますれば止惡作善と云ふに歸すると思ふ、則ち七佛の通誠と稱する諸惡莫作衆善奉行自淨其意是諸佛の教の一偈に外ならぬのである、初句は止惡の義にして則ち消極面の道義を指し、二句は作善の義にして則ち積極面の道義を指すもの、第三句は形式的道德を先にせずして所謂精神

的の道德を基礎となすべきを示し、第四句は總結の文にて、則ち前三句の消極、積極、精神の三意義を明かにするもの、それが即ち佛教一貫の行門であると結示せられたのであります

さてこの止作の二面は又各二方面の道義を有するのであります、優婆塞戒經に依れば世戒と第一義戒との二面を開いてあります、則ち世俗の惡を止めて世俗の善を作すを世戒と稱し出世無漏の惡を止めて絕對解脱の善を作すを第一義戒と説かれてあります、戒の一字は止作の二方面を含むは佛教一般の通説でありまして古今變りは無ないのであります、然し時に消極面の一方に傾くこと、又出世間の方面に流れたること、が、今日の佛教をして實世間と交渉を絶ちて、迂遠無力の宗教たらしめたのであると思ふ、されば佛教の振起を思ふ人はこの點に着眼して世戒と第一義戒との接合を念とし、又止作二面の關係を明かにして積極的に進んで作善の動作を起さねばなりません

ふに當りまして佛教徒と世人の道義觀と趣を異にする點を分明に會得し置くべきであります、世善は日常實世間の上に直接の効益を與ふるものである故、一たび世善尊重の傾向が宗教家に起つたならば、滔々としてこの方面に趨る様になつて、又反對の方向に一種の新弊害を生ずるのであらうと思ふ、元來宗教の第一義は絕對の大悟永遠の生命を理想とするのであるから、單に實世間の方に傾注して、この宗教の眞生命根本義を遺却するならば極めて淺薄なる道念と化して、こゝに人道教となりません、されば世尊は痛切なる訓誡を垂れ給ひてある、世戒のみを持ち三寶に歸依せず、第一義戒を尊重せぬ様ならばそれは丁度彩色畫に膠を用ひぬと一般で少しく他の物が觸れば直ちに剝落して色彩を失ふてあらうと仰せられた、これは深く世人一般の味ふべき涅槃音であるが、特に佛子僧侶としては造次にして念頭より離すべからざる最要の指教と思はねばならぬ

之を要するに世戒たる人道と出世戒たる佛道とは兩者接合一致して活動すべきものであつて、出世善を偏崇して世善を輕視するも又世善に偏傾して出世善を遺却するも、何れも一種の邊見であつて、達人の與みせざる所でありませす

この兩善接合對絶一貫の思想は佛教の初門たる俗戒經に於て詳細に指示せられてあるのみならず、佛教最極の妙談たる法華の俗諦開會の義門に於て遺憾なく調整せられて居るのであります、中古已來出世善に偏傾せるは佛教を達觀する識量に欠きたる不健全なる思想の產物であつて決して今日に存續せしむべきことではありませぬ、又近來世善の一面のみに馳せて何等絶對上の深遠なる信仰なき宗教家の現はれたるは、是れ亦佛教の大綱だに學得せず、曾つて信仰の眞價を味識せざる淺見者流の盲動であります、純善の佛子は相誡めてその非を長せしめぬやうせねばならぬと思ふ

さて佛教の第一義戒たる出世善に就ては、小乗の初めより二種の行法が立つて居る、則ち法行と信行との二つてあります、小乗の行人の初階に三賢と稱するがあ

る、その初位が五停心の位と云ふて、五種の觀念に依りて散亂の精神を調停し則ち平和の心、寂靜の心を得るのであります、この五停心の位の數息觀、不淨觀、慈悲觀、因緣觀の四つは法行信行の別ちは無きようてすが第五の界方便觀に就ては一方に念佛停心と云ふがあつて、智慧の優秀なものは界方便則ち宇宙觀の上に真空の知見を欲求し、信念の熱誠なるものは念佛停心則ち佛陀の功德慈悲を渴仰してその威應力を被ひりて證悟を得んとするのである、こゝにたしかに智慧行信念行の二別を認むることが出来る、而して又七聖の位に進みてその初位に隨法行隨信行の二種あることが見へて居る

この智慧行の觀念系と信念行の信仰系とは幾多の分裂を來たして散漫たる佛教の行法を派生したのであります、法華經の述門は觀念系の頂點に立ちて之を調整したるもの、則ち智者大師に由りて一念三千觀となつて稱道せられ、本門は信念系の頂點に進みて之を統一したるもの則ち日蓮上人に由りて三大秘法の信行とな

天台智者大師は法華經の述門に由りてこの觀念系の法界觀を一念三千論の上に綜合統一を試みたるもの、法然親鸞は信念系に屬して彌陀佛を緣するの宗旨を立てたるもの、而かも何等綜合統一の意義を有せず日蓮上人の着眼は智者の統一的眼光を傳へて更に之を信念行の上に持ち來り、佛教經論の上に散見せる行法も又數千年間各宗に唱へられたる行門も悉く之を溶融陶冶して一大信行中に攝得せり、之を上人の觀心本尊抄若くは立正觀抄等に見ますれば上人の信行は單なる信行にあらざりて觀念系を攝得せる大信行なることが分明に認められます、又之を開目抄若くは報恩抄等に見ますれば信念系に屬する凡ての人格の信仰をも本佛の上に攝取して、こゝに絶大の妙行を示されて居るのであります、

各宗に就いて如上の兩系を考察しますれば一層明白であると思ふ、俱舍成實の二宗は何れも觀念の上には空理を尊重し信念の上には應身佛を信賴し、三論宗は觀念の上には八不中道の理を尊崇し、信念の上には真應

つて弘布せられたのであります、一往は斯くの如くであります、日蓮上人は本門を認むるに述門對本門と見るを一往とし、進んでは述門を攝取して本門に包含せしめ唯一絕對の妙行を示し給ひたのであつて、上人の信行は觀念系と信念系との二系統に顯はれたる佛教行法の全面を攝取統一したる最大絶妙の統一的大信行を開示し給ひたのであります

觀念系に於ける重要な義門は法界觀と人身觀とであります、信念系は實に佛陀觀の上に存するのであります、これは前に云ふ界方便と念佛停心に於て既に分明なるが、法華述門の實相觀を説くと本門の佛陀の三輪を示す上に於ても實に明白に看取せらるゝことと思ふ、さて三藏教の觀念系は折空の理を觀し、信念系は劣應身佛の功德を緣じ、通教は体空の理と勝應身佛とである、又別教は但中の理と報身佛であつて、圓教は不但中の圓理と法身佛とである、斯の如くに觀念の上にある法界觀と信念の上にある佛身觀とは實に佛教行門の大議論として三國の間に傳へられたのであります

二身の佛身を緣じ法相宗は觀念の上には唯識觀を尊崇し信念の上には三身の佛陀を緣じ華嚴宗は觀念の上には唯心法界觀を立て、信念の上には盧舍那佛を取り、眞言宗は觀念の上には六大無碍觀を立て、信念の上には毘盧舍那佛を取り、禪宗は觀念に偏傾して通教体空の理を立て、信念は混沌たる劣應身佛に拜跪し、淨土宗眞宗は信念の一面のみ取りて阿彌陀佛を偏崇し、天台は觀念の統一を理想として一念三千觀を立て信念の上には雜多の對象を許したるも彼の本旨は久遠實成

三身即一の佛陀を取るにありき、日蓮上人はこの天台の一念三千觀を一轉進して信行に攝取し又久遠實成の本佛を絕對的に發揮してこゝに信行の中堅を定め斯くて觀念系の凡べてと信行系の凡べてとを悉く統一し來りて之を本尊の上に顯はしては統一的大本尊となり、之を行法上に教へては有知無知一同に統一的大信仰に入らしめ、之を折伏弘教の上に應用しては諸宗無得道の鐵案となり之を譬說してはこの法門一たび顯はるれば正法像法に論師人師の立て初

めし法門は日出て、後の星の光、巧匠の後に拙きを知らるるべしと宣し給ひぬ、その構成的宗教としての周備せる教義を有することは誠に敬慕の外なしと思ふ

八、行法篇 二、信仰

信仰上の快樂

原田容廣

唯だ快樂と申せば、何れの國、如何なる人種とを問はず、ひとしく、欲しない人はありませぬが、宗教信仰上の快樂にあつては、格別なものである、前者は則ち一時的のものであるが、後者は永遠不朽のもので、あらねばならぬ只だ人世上の快樂の多くは、一定し難く隨て寔に復雜なものであります、所謂老幼男女が其の境遇と、或る場合とに依りて、大いに變化するものなれども、此の信仰上の快樂は常住にして、而も一定不動の地位を存するものであります、去れど世人の多く

は、此の信仰上の、快樂を認め得ず茫々然として、唯だ生を貪るのみで、甚だ面白くない、此の面白くない人が、只だ人世社會上の快樂を追及するのみで終る、而し此れ等も極端に排斥もてきぬ、この快樂あるために、社會の活動が始終止まぬ、申さば社會國家の進歩せる、珍寶と云ふものでもあろう、彼の社會主義者等が、富貴權門の輩を忌憚するは、畢竟する自己が苦痛界を脱し、何ん等かの快樂を理想して居るであらう、決して苦痛そのものを、愛するのではあるまいと思はれます

前に申如く、快樂の焦點と分量とに至つては、どこまでも各別である、則ち上戸の快樂は下戸の苦痛、夫の快樂は婦が苦痛、貧者の苦痛は富者の快樂と、申ものである、故に古來の學者が快樂は、主要なる善と云ひ又快樂は下等にして全く價値なきものだと云ひ、或は快樂は善なる事を信するも、餘りに人は快樂を貪る傾があるから、便宜上抑制する必要があると云ふて居る彼のアリストートル氏の如きは、是等の説を論調して

云く、快樂は主要なる善にあらざるも、善の一分なり只だ或る種類の快樂それ自身に探取して、能き性質を有するものにして、快樂とは、各時間に完結する性質を持ち居るものにして、精神及身軀の作用には、必ず常に伴ふものである、去れば、快樂は活動の附屬物にして、各人が快樂を欲望すると云ふ事は、各自が生活する事を欲すると云ふに同じきとて、更に詳言して云吾人は快樂のために生活するか、或は生活のために快樂を得るかと云ふにあり、此の點に就ては、兩者分離して考ふること能す、活動の快樂と、活動と云ふことは、平凡の人は同一なりと思ふ程密着して居る、活動の存する處には快樂の存するは、事實にして人世の活動は、無限雜多であるが故に、快樂も又無限雜多ならざるべからず

然らば、如何なる快樂を有するを以て、眞正の快樂と爲すべき乎と云ふに、智徳共に高き人の、上等なりと思へる快樂は、即ち眞正なる快樂なり、優秀完全なる人の判断は、快樂の表準なり、然るに實際に於ては、

此の完全なる人の快樂にして、衆人は苦痛にして、厭ふべしとなせるものも是れ無きに非れども、こは多人の智徳が、未だ至らざるに由るものにして、欠點ある人程、下等卑賤なる快樂を好むと申て居る、此の議論はなか／＼に面白と思ひます、所謂人世雜多の快樂は、念々時々刻々に、起伏するものでありますから、恰も泡沫に等しき故、お互が最大快樂だの、眞正の快樂だのとは、決して申されぬから、智行徳相の最も高き上等の人格を完備せられたる、我が大聖釋尊の認められたる大快樂を、お互が信仰の内に受得せんと願ふその心ねが人世に於て、最も必用なので、お自我個の中に、諸の衆生の遊樂する處なりと、指摘されてあります、此れが即ち一定にして常住せる信仰上の、大快樂にして、老幼男女の區別なく等しく受け得らるゝ、上等の大快樂なのであります、人は更に此の點に向つて、宜しく進まねばならぬ、所詮お互の眼界の事は、兎角に壞れ易い、故快樂も又至極變り易いが、御佛の境界は、ダイヤモンドのそれの如く、如何なる場

合に於ても、決して壊れない、故に至極堅固でありま  
すから、我が浄土は毀れず、殊に此の土は安穩である  
と、人世無常の境界に比對して、佛の境界は斯くも常  
住にして永世不變の大快樂を、只だ信仰の一大力に依  
りて、得らるる事を示されたのです

去れど、國民は存外にね威しが誇い、悪い因縁もある  
うが元來疑心がある、迷中の迷者だ、顛倒の想が深い  
なぞである、彼の蝙蝠が、己れの身を樹の枝に、足を  
上に首を下にぶらりとさがり居て、自身の逆さまにあ  
るを知らずに、人間が道を歩くを見て、さてもく可  
笑やな、人間は皆な道を倒に歩行と云つて笑ふたとの  
喩がありすが、人もうの通り常なき世の景況を、却  
て常なるものと思ひ、執し苦となる原因を樂と思ひ、  
心を蕩かし、四大五蘊一も、我を認むべきなきを、我  
なりと計して、己我を増し、身体の極めて穢さを却て  
淨さものと想ふなう、何事も根から斯く顛倒して居る  
故に、人々個々本然清淨なる、如來の智慧及び徳相を  
具して、み佛と聊かも異らぬ身心を持ちながら、彼の

はせに、れ互は眞の快樂を得るのですが、古歌に  
爲せは成る爲さねば成らぬものなるを

爲さねばをの爲さぬなりけり

たゞ自己が勤めると、然らざるとに依る、高山の水は  
深谷に降る能あり、最頂の教は下機を救ふと云へる如  
く、此の法華經の功德力は、如何なる所にも人にも、  
普く及ぶのであります。故に樂草品に戒行を持つ人も  
戒を毀る人も、威儀のある人も無きも、正見も邪見の  
人も、智慧あるも無き人も、等しく法の利益を受くべ  
しと申、公平無私の境を觀るのである、又佛の誓願に  
は、世間の樂及涅槃の大樂を得せしむるとあります、  
故に何人たるを問はず、此の法華經に對し自己が信仰  
の健康を持続せば、身心共に必ず大快樂を得ると申の  
が、れ互にとりて何とも云へぬ程、嬉しき一大快事で  
はありませぬか、宗祖の曰く、

如何して此の度法華經に信を取るべき、信なくして  
此の經を行せば、手無くして寶山に入り、足なく  
して千里の道を企てんが如しと、又曰く、但し御信

妄想に絆されて、無明長夜の夢覺めず、朝に貪瞋邪見  
の毒に犯され、夕には我慢嫉妬の酒に酔ふて、深く煩  
惱五欲の塵垢に埋め隠され、一迷不斷の凡身に於て、永  
く生死を出離せず、徒らに六道の巷に、明し暮して花  
見や雪見ばかりて、眞正の快樂を得ない淺ましもので  
す、古歌に

始めなく迷ひをめける長き夜に

ゆめをこの度いかでさまたさん

とて無始より輪轉して、生死の長夜に無明の妄想を見  
て居る、我々は今幸ひに受難き人身を得たる、此の度  
なれば何んとか能き方法に依りて、妄夢中の僅かなる  
變易ある快樂より已上、更に正しき快樂を得ねばなら  
ぬと云ふのでありましよう、發心正しからざれば、萬  
行空しく施すと、古人も云ひし如く、一步の遠が千里  
をなすもので、吾人の一念が迷へば凡夫、悟れば佛と  
なりて、其の苦樂の度は天地の隔りとなるものです、  
而し源をたぐせば佛と同一なるが故に、佛も我れと汝  
等と異なる事は無と申されたのであります、去れば如何

心に依るべし、つるぎなんども、進まぬ人のために

は用ゆる事なし、法華經の劍は、信心のけなげなる

人こそ用ゆる事なれ、鬼にかなぼうなるべし、日蓮

がたましひを、すみにそめなかり候へ、信せさせ

給へ、佛の御心は法華經なり、日蓮がたましひは南

無妙法蓮華經にすぎたるはなし、妙樂云願本遠壽を

以て、其命を爲すと釋し給ふ、經王の御前には、わ

ざはるも轉じて幸となるべし、あいかまへて御信心

を出し、此の御本尊に祈念せしめ給へ、何事か成就

せざるべき、其願を充滿する事、清涼の池の如し、

現世は安穩にして、後生は善處疑ひなからん

と、實に明解なる御文意ではありませぬか、これを信

仰上に於ける快樂と申ものであります、此れをだに厭

ひ、且つ不快に思ひ、唯だ人世一邊の快樂のみにて、

事足れりど少智大欲な人達が、獨り樂しむが如きは、

所謂アリストートル氏の、欠點ある人程下等卑賤の快

樂を好むものとなる、豈憤慨の至りならずやてしよう、

行くものは如斯晝夜を止めざる、水の流れのその如

く、た互の信心も又亦如是して信仰上の快樂を認め、且つ確にその安泰なる地位に達せんと企つるのが、人世に於ての主眼なのであります、佛の曰はく汝等まことに一心に精進の鏡をきて、堅固の意を發すべしと、教示し給ふてあります、南無妙法蓮華經、

### 日什上人置文諷誦章

八十三老比丘 阪本 日桓 講演  
第廿七回

次、此、經者、諸佛出世之本懷衆生成佛之直道也、又此の三句十九字は本宗の吾人が信念口唱する所の法華經本門壽量品所顯三大秘法の妙法の功德を稱歎し釋したる文であります、偕爰にまた次の一字を置きたる所以は上みに其要法者と云ふ文より去て即身成佛之龜鏡也と云ふ文までが本宗の吾人が尊信する所の本門の本尊の御講談で今此の三句十九字は本宗の吾人が信唱する所の妙法五字の御題目の御講釋を遊ばされた

て有ます其所で所尊の本尊と所信の題目との順序を追て釋したから次にと次の一字を置たて有ます○此經者の三字は我が宗祖所依の開題本一部唯本無迹の法華經を此經者と標したて有ます偕て無迹と申すは開題顯本の法華經には本門未説已前の鉢外の迹門と本迹一致の迹はなき故に無迹と申すて有ます然れども本門鉢内の迹門と本勝迹劣の迹門は宛然として有ます此の經は別して末法下機相應の經て有ます又た開權顯實一部唯迹無本の法華經が有ます此の法華經は天台大師の所依の經にて像法上機の相應の經にして末法には去年の古曆と云ふて無得道の經て有ます偕て無本と申すは此の開權顯實の法華經には久遠實成本佛釋尊の壽命長遠を得たる事は迹門正意顯實相の妙法を證得したる功德に依ると釋して本門正意顯實長遠の大功德を掠奪して迹門の功績となして本門の功德を無みしたる立義なるを無本と申すて有ます○諸佛出世之本懷文此の一句七字は能化の教主の本懷を明した文て有ます此文の意は上みにて辨した開題顯本一部唯本無迹の法華經

は過去現在未來三世九世世々番々出世したる自界他界の本佛も迹佛も皆悉此の經を以て自行成滿し此の經を以て化他し成佛得脱せしむるを以て本懷を達したる者なれば諸佛出世之本懷と御書したるて有ます經に諸佛世尊唯以一大事因緣故出現於世と御説さになりたるは此の事て有ます○衆生成佛之直道也文此の一句八字は所化の得益を明したる文て有ます此の文の意味は設令開權顯實一部唯迹の法華經たりとも成佛の直道ては有ません況や諸宗所依の諸大乘教を無量義經に多留難故迂回峻道と説れたるが故に直道に非ざる事が知れます獨り開題顯本の法華經のみ成佛の直道て有ます經に得入無上道速成就佛身と説れたり迂回道なれば速に佛身を成就する事は出来ません直道なればこそ速疾に佛身を成就するて有ますさて今の諷誦章の三句十九字の文は祖書録内廿二の卷丁に云く三世の諸佛の出世の本懷一切衆生皆成佛道の妙法なりとの妙判が有ます此の祖文に依憑して斯く御書になつたて有ります

善根也書寫者法命久住之根元憶持不忘之大善也、此文の六句卅六字は佛道の通規たる五種の修行に約し本宗能修の行人の功德を歎美して釋したる文て有ます此の六句卅六字は大に分て兩段初め讀誦の下三句十八字は開題顯本の法華經の廣の一部略の方便壽量品要の一四句偈要中の要の題目を讀誦の功德を歎釋し次に書寫の下の三句十八字は次き上みに辯した通り經文を書寫する行者の功德を稱歎して釋したる文て有ます其所で讀誦の二字はともによむと申す謂て有りませるとも文字を見てよむが讀と申し文字を見ずに讀記してよむを誦と申しますけれども今はそれには關わらず開題顯本の法華經略要の經文をよむ功德を歎釋して耳根相應之修行と御書したるて有ます其所で耳根相應之修行の一句七字は能修の行人に約して讀誦の功德を釋したる文て有ます凡て音聲を申す者は不可見有對色とて目には見へねども耳に應對する色法なれば耳根相應と申します相應とは二物相待する辭で讀誦の音聲と耳根と相待して用をなす者で音聲が有ても耳

○讀誦者耳根相應之修行此、土有緣之

根がなければ應ずる縁なく耳根が有ても音聲がければ應ずるに因なく音聲と耳根と因縁相待して始めて用をなす者で有ますから相應と申すて有ます○此、土有縁、之善根也文此の一句八字は所修の國土に約して讀誦の功德を歎釋したる文て有ます倍て此の文に法界有縁之善根也と云はずして此、土有縁、之善根也と御書になつた所以は此土とは我等所住の娑婆世界を指して此土と申したて有ます其所で法界と申すときは娑婆の外廣く十方の國々に亘ります其十方法界の一切衆生の機類は千差萬別にして六根の所用利鈍機類不同にして一様ならず或る佛國にては眼に種々の色を見て爾前の四味及び法華の醍醐味の教義を悟り斷迷開悟し或る佛國にては鼻に種々の香を嗅ぎて大小權實の教義を辯じて斷惑證理し或る佛國にては舌に種々の味を嘗めて四教五時の法門を知りて見性成佛し或る佛國にては身軀に物の觸れるによりて半滿偏圓の法門を知りて出離得脱し或る佛國にては意に色々の事を思惟して一代聖教の法義を悟りて得三菩提する等の種々の佛國が有りますか

ら法界とは御書にならぬて有ます然るに此の娑婆世界の衆生は此土耳根利とて六根の中に於て耳根が第一、利にして目に見意に考へ舌に嘗め身に觸れ鼻に嗅ぎても知れざる事を一度聞きて耳に觸れば如何なる難事も證知します依て此の土の人々は讀誦説法の音聲が耳に觸れ相應して成佛得脱の利益を得ますから斯く御書になつたて有ます○書寫者法命久住之根元憶持不忘之大善也文此三句十八字は分て二つ初の一句三字は標し次の二句十五字は釋す此の釋する中に又た分て二つ初の一句七字は化他の書寫を釋し次の一句八字は自行の書寫を釋したる文て有ます書寫と申すは凡て一切内外の典籍を竹帛に書き寫す事て此の書寫に内典外典其他一切の書寫には自行と化他の二つが有ります今此の讀誦章の書寫と云ふは開述顯本の法華經の廣、畧、要の經文を書き寫して他人のためにし自身のためにするて有ます○法命久住之根元文此の一句七字が上て云ふた化他の書寫の文て有ます如何となれば本宗の四衆の人々が法界の一切衆生のために諸佛同道開述顯本の法華

財團勸募實驗談

彌勒道人

經廣の一部の經文、或は畧の方便品壽量品、或は十如是及び自我偈、或は一四句偈の經文、或は要が中の肝要なる五字の題目を黃、卷、赤軸に書寫しまたは石壁樹木に書寫して末法萬年の外盡未來際に傳へて法界の一切衆生をして受持し讀誦し解説せしめて法華經本門壽量品の無作三身即一正在應身如來の法命を久しく世に住せしめて一切衆生に利益を興へしむるが爲に書寫者法命久住之根元と釋したて有ます文字は法身の氣命と申されたるは此の事て有ます○憶持不忘之大善也文此の一句八字は自行の書寫の文て有ます憶とは記憶て持とは念持て上みに辯じた通り開述顯本の法華經の廣、畧、要の經文を自行のために書寫し記憶念持して忘れざる爲めにする故に憶持不忘之大善也と釋したるて有ます倍て受持讀誦解説書寫の五種の修行は佛法の通規て有ます然るに此の讀誦章には文面顯著に御釋なされたるは讀誦書寫の三種の修行て受持と解説との二種は文になければ意味は此の章の中に含攝して有る所以は上に於て辯して聽せたる通りて有ます

管長現下が昨年財團組織の計畫について御話があつたとき、至極結構なと思つたが、實行が困難であると、思つて杞憂を懐いて居りた一人である、口てこそ二十萬圓計りと云ふけれども、他人の喜捨を仰ぐと云ふとは不可能のとはあるまいか、某は一萬圓某は何千圓、九て夢の様な話である、特に一般宗門の現狀は財政困難の極點であるから、恐らくは失敗に終りはしまいか、尤も財政困難であればこそ財團の必要はあるに相違ないが、併し管長現下が護法扶宗の念の熱烈なる、水火をも辭し給はざる覺悟にてればせば、上佛祖の冥護と下一般僧俗の同化とか感應投合して、或は意外の好結果を見るとか出来ないと云ふ一點の光明もあつたのである、爾後着々進行して、東西南北呼應無量珍寶不來自得と云ふ有様である、この勢で進めば恐く豫定額に達するとは保證し得られると信する、今日迄發表になつた成績に徴して見ると、平常布教に盡力して居つた土地がよろしき様に見へる、寺院

對檀家又は墓地對檀家と云ふ方面よりも、宗義對信徒と云ふ方面が成功して居る、宗義的活動を以て生命として居る僧侶は、身輕法重死身弘法の覺悟があるから自己の利害を念頭に置かない、隨て能動的に勧誘するから之に應ずる信徒も大菩提心より喜捨するのである、眞に淨業と心得て居る方である、之に反して寺院本位の者は、寺院經營の財源に影響しはせんか、自己の生活の枯渴を來す憂なきかとの心配があるから受動的に勧誘する、因て之に應ずる檀家も義務心より吐出するとになる、されば其の成蹟に多少の等差は免れないのである、

予は宗義的方面に活動して居る人に何も云ふ必要はないのである、寺院本位の人に向つて予の實驗せる事柄を參考迄に御話する考へてある、予は元來宗義觀念と寺院經營の混血兒である、

單に寺院本位自己生活中心主義では到底淨業に従事するとは出来ない、依て寺院は何の爲に創立せられたるものか、自己は何の爲に生活しつゝあるかと一考すれば、すぐ宗義觀念が湧出して來る、宗義觀念があれば淨財の活動は出来るのである、寺院の存在は吾人に安逸を與ふる爲でなくして、宗義擴張の導場である、吾

るは蓋し其の宜しきを得たるものである、予は斯くの如き懺悔の情を生じ近頃自己の檀信徒を勧誘したのである、然るに佛祖吾を慰み給へるか、十中の八九は豫定以上の喜捨をして呉れたので、未だ結了はしないが管長宛下の最初財團組織の御話しがあつたときに心配して居つた事柄と丸て反對である、之を要するに財團の結果に對して樂觀を懐くものは宗義的活動に従事するもので、悲觀を懐くものは寺院本位に没頭して居る者となるのである、同じく僧侶となつて一生を送り、未來靈山に往詣して佛祖開祖の御側に待べるのである、樂觀的に大活動を試みた方が得策である、先づ在家の人で墓場の必要より檀家となつた人でも、後には寺院本位になる、今一轉すれば宗義心を喚起するのである、宗旨を擇ばなかつた人でも、一旦檀家となれば自然に信仰方面の欲求が生じて來るは理の然らしむるのである、まして財團の話をすれば多少に拘はらず義務を盡す、之がやがて縁となりて法門の事を尋ねる動機となり、層一層寺院の經營を責くことになり隨て自己の生活上にも著しく補助をして呉れることになり、現に予の檀家の如き勸募已前には參詣も少なかつたが、寄附に應じた者は渴仰の心を生じて續々通常經

人はこの導場に住して佛陀の遺教を宣傳する爲に生活して居るのである、若し少くとも之の心懸けなければ法師の皮を着たる畜生、法師の名を盜める盗人である、斯くの如きの一念心の底に動けば如何に我が身の罪深きとなるかは何とも形容の出来ぬとである……凡そ世に生活して居る者は一定の職業に従事して居る、教師は教育の任務を執り、政治家は國家の經綸を論じ大工は家を造り、商人は商業を營み、各々其の職務に忠實にやつて居る、獨り吾人は自己の職務の布教を爲さず、當小僧の時に覺へたる簡單な御經を何時も繰返へし、過分の布施を受けて安樂に生活して居るではないか、勞力皆無過大の報酬を受けて居り、安閑として生命を維持して居るのは、宗開祖の餘徳とは云ひ乍ら何と勿躰ない譯ではあるまいか、思ふて、に至れば寺院の維持や自己の生活に多少の影響を來すが如きは毫も顧慮するの余地がないのである、宗開祖の御恩を報ずるには立教開宗の本源を轉信し、一切衆生を濟度するの外なきも、自分は德薄垢重にして之が天職に堪へずとせば、之の天職に堪ゆる者を養成し、之が傳道を試み、開祖棲神の本山を經營し、全國要處の道場を保護する爲に生れたる教學財團の爲に、一身を捧ぐ

費に補給して呉れるのである、生活費用に欠損を生じはせんかと思ふたのは誤謬で、事實は之と反對である思ふに寄附せるを動機として歡喜の情湧起し本來の宗教心悱興し、思ひやりの心即ち慈善心の働きが功德力と化し、住職が財團の爲め骨が折れるならんと同情より來る賜ものである、

財團の目的の第一條項たる徒第教養の話しをすると、先づ第一に檀家の口より出づる者は、昔は分らぬとは寺の和尚に聞くと云ふて居たものです、今日は日進月歩の時勢でありますから、和尚も勉強なさらねばなりませぬ、夫れに就ても御足がなければなりません、教學財團の企は誠によい思ひつきであります、應分のとは致しますとの口上である、嗚呼昔は分らぬとは和尚に聞けとの裏面に、今の御出家は何れも知らぬとの失望の言葉が含まれて居る、菩提寺の和尚さんは名僧高徳が欲しい、今は社會が進歩して居るから昔に分らぬとても今は分るとが多い、併し今は亦今の時勢に順じて分らぬとが澤山ある、人世の煩悶解脱の要義安心の捷徑斯くの如き必要なる問題に對して教へて貰ひたい、其の教へる御出家の養成所たる財團であるから至極結構と云ふような摸樣である、自分の方で遠慮して

居ると檀家の方では、何故に我れを後にするやとの不平の聲を耳にするのが多い、已上は余の實驗談であるが、余と同一感想を浮べて遲疑しつゝある人の爲に云ふのである、

### 焦慮せよ道義の發展に

(按處にも救ひの手を下すべき機あり)

青村

今の世 道念徳操の衰退を啣ちて たゞ徒らに慨然たるものは 开は何等の益なき所作であつて 假にも宗教家たるものは 之が類勢の挽回に就て 畫策する處がなくてはならぬ 則ち如何にせば 此世道人心を清けく新らしくなし得らるか 如何なる方面より手を着けなば 其聖業の端緒が開けて來るかと 少なくとも焦慮熱注しなくてはならぬ  
唯徒らに憤慨嗟嘆するものは 恰かも火事場に駆けつけて其猛烈たる火勢に驚き 是は困つたものだ氣の毒なものだと狼狽するのみで 水一滴撥ふ氣のない癡

呆漢と同断て これ位世の中にまぬけの沙汰は恐らく無からう 火事場に駆けつけた以上は 何處から水を振ふべき乎 何處が一番部のよき消口である乎の考慮が無くては 見る／＼火の手は四方八方に擴がる計りで 消防の効を奏することは斷じて出來得ない 宗教家として此俗惡の社會に處し 紊れに亂れし世道人心を廓清すべく、大事の立場に一身を投じた以上は、消防夫の水と消口とに注意するが如くに 如何にせば……如何なる方面より……との考慮は 是非ともなくてはならぬ要件であつて 特に統一の聖業を遂行すべき大責任ある本化教徒は 一段の覺悟と考慮とを要する次第である  
近頃 施本傳道の風日を逐ふて行はれ 道路布教に鎌倉當年の面影を偲ばしむるものある杯 宗徒の奮勵や、可なるものを見るに到つたのは 慶すべき次第ではあるが 前者の比較的手筈あるに引換へ 後者は割合に其効果渺なく 否寧ろその反應のあるや無しやも疑はれるのである

されば他人がやるから候と云ふて やみ雲りの眞似ばかりしないで 宜しく自己の發見せる部面に 其法輪を轉じ其慈眼を垂れて 少しも多く實効を奏すべく活動なくてはならぬ

二月一日の東京朝日新聞に左の記事を見た

●子殺事件と鮫ヶ橋町民 四谷區の貧民窟鮫ヶ橋に伊東仲藏(征川)お辰と云ふ鬼夫婦現に數多の嬰兒を殺し四谷署の手に捕はれたに付きては同町民連は一方ならず憤慨し貧棒しても耻を知る吾々社會から斯る非道の人物を出しては鮫ヶ橋の名折れ故以來互に相戒め斯る輩を再び出さぬやうせんと云ひ同時に同所の親分梶虎事高橋虎吉は憤慨の餘り今度前記右夫婦が出獄しても必ず一步も此鮫ヶ橋の土を踏ませぬ様にしたとして町内を觸れ歩き町内一致して可決したりとは同所の氣風こそ面白けれ

と 是れ寧ろ一顧を要すべき文字ではあるまいか 由來今の世は上下押しなべて 道念徳操の廢退せることは事實であるが 中にも申流以上が最も甚しいの

て 世人の捨て、顧みない下層社會に 却て漂たる氣節の存するものがある 前掲鮫ヶ橋町民の氣風は偶々其一例である 頼母しい消息ではないか されば此部面に猛火の消口を索むるのも 穴勝空論ではなからうと思ふ 虚譽をすて、實果を希ふ宗門の健兒は 宜しく一顧再顧して欲い 誰もまだ茫然して手を此方面に着けて居ない様だから

單稱派の有志者が世にも愍然の癩病 患者を收容して 之が施療と共に精神上の糧を與ふべく 身延深敬雜亂法華賽錢坊主の責ても罪はらほしと 自分は其贊同隨喜に客ならざる一人であるが 斯ふ云ふ風にそれ／＼新しき方面に 熱烈至誠の自己の道念を披瀝し分布し、注射し、開展して行たならば 人心の廓清教勢の發展は 序を逐ふて進行するに難からぬと思ふ 自分も 目下大に計畫して居る事があるが 其目論見は何れ事實の上で 諸君に見て貰ふことにしやう

雜報

▲臨時宗會の召集 教學財團設立せられ已に五萬餘圓の基金も積立られたるを以て本年秋期に至らば其果實を收得し財團の目的たる興學布教の發展を爲すを得べきを以て之が發展の方法及豫算等將來の大方針確立の必要あるを以て臨時宗會を開く事と爲り本月十日を以て左の如く臨時宗會召集令を發せられたり

宗 内 一 般

緊急ノ必要ヲ認メ宗憲第二十條全第三十四條及全附則第二號第一條ニ依リ本宗々會議員ノ協賛ヲ經テ本年四月十五日ヲ以テ臨時宗會ヲ京都總本山ニ召集ス  
明治四十年三月十日

- 管 長 大僧正 本 多 日 生  
宗務總監 僧 正 今 成 乾 隨  
本山部長 僧 正 野 口 義 禪  
教務部長 僧 都 井 村 恂 也  
法務部長 僧 都 笹 川 眞 應

▲本山大法會 例年四月十一日より執行せらるゝ大法會は本年も例年の通り執行せらるゝ事に治定せられ告示第壹號を以て左の通り布達せられたり、而して本年度登山僧は各教區宗會議員をして之に當らしむる都合なりと言ふ

告示第一號

宗 内 一 般

總本山大法會來ル四月十一日ヨリ全十三日迄三日間執行ス  
教學財團翼賛員并大法會基金施主ノ爲メ前期間大法要ヲ兼修ス

▲第一回西部講習會 昨年宗會に於て議定せられたる講習會は東部第一回は昨年十月千葉縣東金町に於て執行せられたるが西部第一回は本年四月四日より全月十日迄京都總本山内に開設すること、決定せられ其旨發表せられたり、來聽者は何人にも許可せらるゝ都合なれば希望者は其趣總本山内講習會事務所に申出らるべし 參會者心得左の如し

告示第三號

第十二教區乃至第十九教區

宗規第七則第十九條第二十條ニ依リ第一回西部講習會ヲ本年四月四日ヨリ全十日迄京都總本山内ニ開設ス  
西部各教區布教師ハ全則第二十一條ノ規定ニ依リ必ズ出席スルヲ要ス  
西部各教區内寺院住職ハ隨意參會スルコトヲ得  
講師ハ阪本綿織本多ノ三大僧正及清瀬野口ノ二僧正トス  
來會者ハ前日中ニ到着シ其旨講習會事務所ニ申出テ其指揮ヲ受クベシ  
來會者ノ旅費ハ自辨トス

食費及寢具ハ宗費補助費ヲ以テ支辨スル豫定ナルモ人員ノ都合ニ依リ其補助ヲ制限スルコトアルベシ  
來會者ハ參考書トシテ祖書及聖語錄ヲ携帶スベシ  
講習科目ハ會場内ニ揭示ス  
講習會事務所ヲ本山ニ置ク

▲備前和氣通信 本成寺信徒坪井喜介氏は平素熱心なる信者なるが今般本宗の教學財團の興るや奮て應分の喜捨せるのみならず第十五教區内の入用各寺に對し財團集金用紙五ヶ年分即五千五百枚を自家に於て印刷し各入用に應じ寄贈せりと云ふ

▲七里法華傳道隊 時將に春陽上總國七里法華の僧侶は傳道隊を組織し四月一日出發東海道の各所に教演を張り全月十一日より總本山妙滿寺に執行せらるゝ大法會に參拜すると云ふ

▲千葉縣通信 山武郷大平村廣根圓壽寺は昨年春より本堂再建に取掛り漸く本年に到り悉皆落成し去る一月十日より十二日迄三日間落成式並びに入佛供養を執行したり該寺は數代已前に本堂朽廢し數年間放任せられありしが明治卅三年金阪義昌氏該寺を發務し檀頭北田權三郎氏を勸信したりき全氏も大に悟る處ありけん金阪師の請ひを入れ金一百圓と古觀音堂と並に水田地所一反歩余を將來營繕費に寄附すると快諾し亦た師は相當なる積立を爲し普請金を蓄積する四ヶ年明治卅六年法弟中村通寬に任職を譲りたり中村氏又先例に因り積立蓄積すると數年然るに北田氏は不圖發病し大學病

院に入院するの不幸に會したるも長子(彦三郎今の學士是なり)二子佐四郎を枕邊に呼て金阪氏に口約せしを物語り其實行を遺命し長逝せられたり二愛兒等は嚴父の遺言に依り直に着手せんとせし時會々日露役戰に際し暫く其の時機の來るを待ち平和克復となり故に幸として起工に取掛り今回落成せるを以て盛なる音樂法會を修するに至れり法要中は自他宗の別なく參詣者は日々百五十人以上あり三日間法會終り後ち廣根區内區長を始め自他宗の者相會して再建堂に於て祝宴を開き金阪氏及中村現任職の挨拶あり參列者よりも祝詞あり後ち金阪氏の發聲にて萬歳を三唱し午後十時頃各自散會したりと云ふ、同寺本堂再建のため盡力せられし人々は現任職中村通寬廣根區長總代人北田丈一郎、高知尾宇内、北田甚太郎、北田重五郎、小川利八の諸氏なりと云ふ

財團彙報

▲千葉縣勸募委員 本月四日上總東金西福寺に委員會を開き勸募上の打合せを爲し應募申込者の拂込を本月十五日迄に結了する事及一般檀信徒の勸募を六月中に結了する事其他數件を議定して散會したり

▲第一回評議員通常會 設立認可後直に開かるゝ豫定の第一回評議員通常會は本年四月大法會の際各地信徒の登山を好機として開會することに決定し市橋理事長より各評議員に召集狀を發せられたりと云ふ

▲財團基金拂込に就て 財團基金の拂込は屢々公示せられたる如く總本山妙満寺(口座番號四三六九番)に宛て振替貯金に依り拂込むべき事に定められあるものなるに往々宗務廳若しくは統一團に宛て拂込るゝものありて宗務廳若しくは統一團より更に轉送せらるゝの手續を要し當局者の迷惑せらるゝ事非常なる由なれば拂込者は注意して拂込先を混雜せぬ様せらるべし、又數人分合併拂込にして其内譯の記入なきもの、内譯と合計と相違せるもの等ありて一々照會を要し非常の手續と時間とを費し從て報告の遲延を來すに依り拂込者は通信文記載欄に可成詳細に拂込金額、氏名、回数(何回分納の)を記入し合計金額と拂込金額と相違無之様送付せられ度く、若し多人數にして通信文記載欄に記入し能はざるものは別紙に認めて送付するもよろしく、又財團より交付せられたる受領證明紙を使用するものは該用紙の報告書を一括して送付するも差支無之との事なれば拂込者は何れの方法に依るも差支なけれども兎に角錯誤なき様充分注意の上拂込まれたし、明細表若しくは受領報告は品川支所へ送付せらるべく候、統一報告の件に付き照會を要するものは品川支所へ照會せられ度し振替貯金拂込用紙及受領證明紙入用の向は品川支所へ申出あれば全支所より交付せらるべし

# 公 告

宗費、財團基金、統一誌代等ノ拂込ハ各種別ニ依リ夫々拂込ノ口座ヲ別置シアルモ拂込者ニシテ往々混合拂込ヲ爲ス者アリ爲メニ轉送ノ手續ヲ要シ勞力ト時間トヲ空費シ迷惑不尠候條拂込者ハ左記種別ニ依リ拂込口座ヲ區別シ拂込相成度此段公告候也

## 總本山妙満寺 統一團

財團基金	四三六九	總本山妙満寺
宗費寺數割等	一一一八	
統一誌代	一一一九	
書籍代等		

### 教學財團寄附申込表 (第五回)

金拾圓	東京府品川本榮寺檀家	相澤	とき	金貳圓五拾錢全	若松町本經寺住職	渡邊	智隆
金參拾圓	千葉縣國府里廣福寺住職	飯島	幸信	金貳圓五拾錢全	元信行寺跡	山本	妙純
金拾圓	全 大竹常泉寺住職	川崎	英照	金拾圓	東京市牛込區原町	久成寺檀家一統	朝倉 弘元
金參圓	全 滿榮寺兼務	全	人	金拾圓	千葉縣瀧口本妙寺住職	高石	快成
金五圓	廣島縣井原高源寺住職	堤	正音	金五圓	全 潤井戸泰行寺住職	吉田	純賀
金五圓	東京淺草壽仙院内	川崎	つね	金貳拾圓	東京市淺草法成寺住職	關田	養叔
金拾圓	全 本郷顯本寺檀家	幸田彦三郎		金貳拾圓	千葉縣山根飯尾寺檀家	大和	八石太郎
金貳拾圓	全 護持會員	松崎	米吉	金參拾圓	東京府品川妙國寺檀家(第五回)	今井	正次
金四圓	全 岡山縣和氣本成寺檀家	長谷川	司眞治	金拾圓	中村安之助	金拾圓	松金 仁藏
金六拾圓	全 東京小石川本念寺住職	土井嘉衛門		金六圓	高橋 勘藏	金六圓	犬塚 信行
金五拾圓	全 寺檀家	大須賀玄遊		金六圓	加藤 ひさ	金五圓	鈴木仙太郎
金拾圓以上(二口ノ内)	大阪耳原法華寺檀家	矢代太郎吉		金參圓	竹内 かく	金參圓	田邊 幸則
金五圓	岩手縣盛岡法華寺檀家	村田 佐吉		金七圓	千葉縣内田立本寺檀家	御園生兼吉	薄網 嘉吉
金四拾圓	全 三十七名總代古川榮三郎外三名	田中	日晃	金五圓	金杉伊三郎	全	小澤竹次郎
金壹百五拾圓	東京牛込久成寺住職	森安	日觀	全	薄網平次郎	全	小出島太郎
金拾圓	全 千葉縣大和田寶藏寺住職	全	人	金貳圓	全 縣上野妙典寺檀家	全	石井 安藏
金貳拾五圓	全 寶形寺兼務	松本	眞釋	金貳圓	岡本 岩吉	金壹圓五拾錢	岡本 太吉
金五圓	全 高田常眞寺住職	島本	順祐	金壹圓五拾錢	薄網 芳吉	全	横山次郎作
金五圓	全 本納長榮寺兼務	石渡	英哉	全	薄網 芳吉	全	石原 俊一
金拾圓	全 小野妙榮寺住職	加藤	智明	全	柴崎 太吉	全	池澤 六郎
金拾圓	福井市相生町善慶寺住職			全	薄網 芳吉	全	成島 ちか



全 岩倉七郎平 全 藤田 兼藏  
 全 金壹圓五拾錢根本 松造 全 金壹圓五拾錢岩佐 龜吉  
 全 池田 常吉 全 淺川平四郎  
 全 淺川半次郎 全 淺川 半助  
 全 萩原 長樹 全 金壹圓 深川 すへ  
 全 田中 金作 全 藤田 りさ  
 全 藤田 よの 全 吉村善右衛門  
 全 穂川 ひろ 全 久野 みと  
 全 中村 立米 全 澤崎甚右衛門  
 全 中村 テル 全 上田 延治  
 全 池田覺次郎 全 千田 延治  
 全 有澤 壽雄 全 牧島 九子  
 全 小竹 大助 全 米倉 米子  
 全 寺島たつ子 全 夏目 清  
 全 夏目 重吉 全 小屋端仁太郎  
 全 高橋 末吉  
 申 込 變 更  
 千葉縣土氣西谷寺住職金阪教隆金廿五圓申込ノ處左ノ如ク變更ス  
 金拾五圓 千葉縣土氣西谷寺住職 金阪 教隆  
 金拾圓 全 縣越智常圓寺兼務 全 人  
 全縣吉井光明寺住職米倉義明金拾五圓申込ノ處左ノ如ク變更ス  
 金五拾圓 千葉縣吉井光明寺住職 米倉 義明

教學財團基金寄附受領表(第四回)

金貳圓五ノ一 千葉縣長谷川正覺寺住職 廣部 玄通  
 金拾貳圓 全 飯野法性寺住職 津田 察圓  
 金壹圓二十ノ一 神奈川縣小田原妙經寺住職小鹽智山  
 金壹圓五拾錢皆納千葉縣村田泉福寺檀家大久保半次郎  
 金參拾圓五ノ一 兵庫縣明石圓乘寺代表 藥師寺市藏  
 全 千葉縣柴名蓮華寺住職 齊藤 義盛  
 全 眞福寺兼務 全 人  
 全 太田法雲寺住職 鶴岡 惟中  
 全 正立寺住職 柳生 肇叔  
 全 能泉寺住職 大和幸英  
 全 奈良本泉寺住職 永瀬 量一  
 全 東京品川眞了寺住職久我默宗  
 全 岡山縣津山弘通所信徒 高山 常吉  
 全 林 日法  
 全 坂 卷 高  
 全 齊藤 立靜  
 全 渡邊 元教  
 全 水野 乾誠  
 全 因幡 善英  
 全 立花 容乘  
 全 鈴木 智政  
 全 寺田 善海  
 全 金壹圓 皆納 東京品川本光寺檀家  
 金拾六圓 五ノ一 千葉縣廣嚴寺住職  
 金拾圓 全 岩手縣盛岡法華寺住職  
 全 妙法院兼務 全 人  
 全 千葉縣榎戸新藏寺住職 因幡 善英  
 全 千葉縣榎戸新藏寺住職 立花 容乘  
 全 高岡要行寺住職 鈴木 智政  
 全 大袋大經寺住職 寺田 善海  
 全 金壹圓 參拾錢 全 岡本善四郎  
 全 金壹圓貳拾錢宛 全 平松義三太 從野元吉  
 全 金壹圓拾錢 全 從野橫太郎  
 全 金貳圓 全 從野秋二郎 岡本谷五郎  
 全 金八拾錢宛 全 從野梅吉 從野丑松  
 全 金七拾錢 全 佐々木桃三郎  
 全 金六拾錢宛 全 平松松太郎 常次利三吉  
 全 金五拾錢宛 全 平松磯太 原佐太郎 平松五三郎  
 常次萬造 常次利吉 内山長吉 常次多次郎 山  
 本石次 岡本新三郎 高瀬樸三郎 阿部房治 尾  
 崎喜八 藤原光造 岡崎金五郎 義光俊三  
 全 金四拾錢宛 全 岡野作太郎 寺見應治 山上藤三郎  
 全 畑孫四郎 平松鹿太郎 金谷吉治 從野京平  
 從野百三 佐々木淺吉 岡崎平三 須波廣吉  
 全 金參拾錢宛 全 從野早吉 松本綱次郎 岡崎房三  
 全 金貳拾錢宛 全 常次小波 從野惣五郎 奥下作次郎  
 從野千次郎 從野龜太郎 吹本十太郎 須波幾  
 平 平松安太  
 全 金拾五錢 全 吹本幸八 金拾四錢 全 安藤益太郎  
 全 金拾錢宛 全 從野八百吉 須波水三郎 須波清作  
 全 金貳圓宛 五ノ一 小林傳六 水野泓三郎  
 全 金廿錢宛 五十ノ三 宮崎賢二郎 妹尾爲次郎 安藤  
 幸成 服部金五郎 五ノ二 安藤成績

金貳拾圓 五ノ一 全 生實本滿寺住職 竹内 無着  
 金七圓 全 洞井戸泰行寺住職 高石 快成  
 金參圓 全 瀨口本妙寺住職 朝倉 弘元  
 金壹圓 全 永吉林泉寺兼務 吉田 純賀  
 全 愛知縣刈谷長遠寺住職 武藤 照惠  
 全 名古屋靈山寺檀家 檀家 中  
 全 慈雲寺檀家 田原善兵衛  
 全 緒川越境寺住職 佐藤榮次郎  
 全 千葉縣大澤大澤寺住職 石川 顯隆  
 全 高田長榮寺兼務 島本 順祐  
 全 荳野正法寺住職 笹本 日基  
 全 神房妙照寺兼務 秋葉 純一  
 全 東京府品川本榮寺檀家 相澤 トキ  
 全 栃木縣茂木本岡寺住職 長岡 教光  
 東京府雜司ヶ谷本榮寺檀家  
 金五圓 二ノ一 長島幸之助 金五拾錢 六十ノ一  
 柳下長次郎 金廿五錢宛 廿ノ一 磯月久一 齋藤吉  
 次郎 岡本光之助 金八錢五厘宛 六十ノ一 安齋德  
 太郎 田中勝之  
 岡山縣和氣本成寺檀家  
 金貳圓貳拾錢宛 五ノ一 從野傳太郎 須波兼松  
 金貳圓宛 全 弓削猛丸 金谷猪三治 溝口寅太 藤  
 原勇三郎 全 岡本久次郎

全 金壹圓 參拾錢 全 岡本善四郎  
 全 金壹圓貳拾錢宛 全 平松義三太 從野元吉  
 全 金壹圓拾錢 全 從野橫太郎  
 全 金貳圓 全 從野秋二郎 岡本谷五郎  
 全 金八拾錢宛 全 從野梅吉 從野丑松  
 全 金七拾錢 全 佐々木桃三郎  
 全 金六拾錢宛 全 平松松太郎 常次利三吉  
 全 金五拾錢宛 全 平松磯太 原佐太郎 平松五三郎  
 常次萬造 常次利吉 内山長吉 常次多次郎 山  
 本石次 岡本新三郎 高瀬樸三郎 阿部房治 尾  
 崎喜八 藤原光造 岡崎金五郎 義光俊三  
 全 金四拾錢宛 全 岡野作太郎 寺見應治 山上藤三郎  
 全 畑孫四郎 平松鹿太郎 金谷吉治 從野京平  
 從野百三 佐々木淺吉 岡崎平三 須波廣吉  
 全 金參拾錢宛 全 從野早吉 松本綱次郎 岡崎房三  
 全 金貳拾錢宛 全 常次小波 從野惣五郎 奥下作次郎  
 從野千次郎 從野龜太郎 吹本十太郎 須波幾  
 平 平松安太  
 全 金拾五錢 全 吹本幸八 金拾四錢 全 安藤益太郎  
 全 金拾錢宛 全 從野八百吉 須波水三郎 須波清作  
 全 金貳圓宛 五ノ一 小林傳六 水野泓三郎  
 全 金廿錢宛 五十ノ三 宮崎賢二郎 妹尾爲次郎 安藤  
 幸成 服部金五郎 五ノ二 安藤成績

金五拾錢 二ノ一 殊尾芳太郎 金四拾錢 五ノ一  
 河野彦治郎  
 神奈川縣小田原妙經寺檀家  
 金壹圓 二十ノ一 川島竹次郎 金拾錢 全 田代兵  
 太郎  
 金六拾錢宛 全 益田勘右衛門 飯田榮助 猪俣大吉  
 岡崎勇次郎 中戸川忠右衛門 中戸川萬五郎 中  
 戸川芳太郎 石川庄藏 中戸川好治 星野喜三郎  
 金五拾錢宛 全 小澤柳吉 龜井國造 門松米吉  
 金參拾錢宛 全 青山丑三郎 長野角藏 清水七兵衛  
 金廿五錢宛 全 岩城萬造 柴田虎吉  
 岩手縣法華寺檀家  
 金貳圓宛 五ノ一 石川嘉一 細越和吉 佐々木竹藏  
 關西治郎 石川伊三郎 湯淺磯次郎 中村鎌藏  
 金壹圓宛 全 村田佐吉 桑原徳次郎 工藤善太郎  
 金田新兵衛 佐々木岩太郎 細越平吉  
 金四拾錢 全 長岡徳太郎  
 金貳拾錢宛 全 間宮トラ 間宮モト 中島元道 間  
 宮元照 小野教孝 池田クニ 西國キタ 安宅仁  
 太郎 小野ミネ 小野トク 中市陸造 儀俄テイ  
 島川ナミ  
 兵庫縣姫路妙立寺檀家  
 金貳拾圓 五ノ一 澤田かめ 金拾圓 皆納 菊本源  
 三郎  
 金貳圓宛 全 松島らん 吉岡傳七郎

金壹圓宛 全 平野庄太郎 淺田嘉助 三ノ一 平野  
 くに 十ノ一 有田十九松  
 金廿錢 五ノ一 川西榮次郎  
 岡山縣津山本蓮寺檀家  
 金貳圓 五ノ一 妹尾増次郎 金五拾錢 全 谷口經  
 次郎 妹尾爲吉 五ノ三 安藤成續  
 福井縣今庄善勝寺檀家  
 金貳拾圓 五ノ一 京藤長右衛門  
 金拾圓 全 京藤甚五郎 金參圓 全 京藤由太郎  
 金貳圓 全 京藤小八郎 金壹圓五拾錢 全 川崎喜作  
 金壹圓 全 後藤常藏  
 愛知縣豊橋市妙圓寺檀家  
 金四圓五拾錢 皆納 黒川與吉 金參圓 五ノ一 兼  
 子洋平 金貳圓 川口金之助  
 金壹圓八拾五錢 皆納 伊藤團藏 金壹圓參拾錢  
 皆納 渡邊新造外一名  
 金壹圓 五ノ壹 菅沼彦右衛門  
 金六拾錢宛 全 加藤熊次郎 長尾謙三 酒井善五郎  
 金五拾錢宛 全 内藤常次郎 皆納 藤原平太郎  
 金四拾錢宛 全 平山季八 齋藤彌吉  
 金參拾錢宛 全 内藤福次郎 太田市造 酒井善治郎  
 野末喜十 都築新次郎外二名  
 金貳拾錢宛 全 兒玉安次郎 中村右喜人 彦阪伊之  
 作 藤田茂平 島田伊勢吉 山本源作 島田新助

藤井平三郎 柴田榮次郎 宮本徳次郎 柴田喜  
 八 柴田助五郎 龜田甚九郎 石井又助 石井信  
 藏 安藤源六 廣木豐吉 廣木長十 藤田彌十郎  
 柴田長三郎 柴田喜一 龜田甚七郎 石井吉作  
 山本源藏 宮本要吉 鍋島傳次 伊藤團藏 松下  
 忠次郎 酒井仙次郎 太田清六 内藤由次郎 都  
 築仁作外一名 鈴木萬藏外一名 山下銀藏外一名  
 伊藤増藏外一名 都築新三郎外一名 都築善吉  
 外一名 竹腰圓藏外一名 都築市作外一名 伊藤  
 甚三郎外一名 横田梅吉 杉山安吉 兵藤耕次郎  
 梅田宇之吉 藤原辰五郎 打桐政五郎 齋藤政  
 治 打桐そて 藤原美三吉 渡渡安次郎外一名  
 皆納 渡邊龜吉  
 金拾錢 全 竹腰喜代作  
 石川縣濱本成寺檀家  
 金壹圓宛 五ノ一 森下長藏 吉田源次郎 皆納 吉  
 田ひで 吉田いの 根上たみ 林たつ  
 金六拾錢 全 竹内治助 金四拾錢 全 森下慶造  
 金五拾錢宛 全 前田幸助 林七藏 木村源太郎 伴  
 田甚藏 横山吉藏 森下又吉 皆納 越村まつ  
 伴田ゆき 森下みつ 森下ひろ 前田しれ 林う  
 め 森ちへ  
 金參拾錢宛 全 森佐吉郎 皆納 森下さく 中野つ  
 る 森さよ  
 金貳拾錢宛 全 藤田康喜 前田新助 皆納 森下も

と 藤田ひで 前田とみ 竹内ふな 横山ひな  
 金拾錢宛 全 前田吉平 安田善吉 山本治助 皆納  
 竹内しの 金拾五錢 皆納 木村はな  
 愛知縣緒川越境寺檀家  
 金參圓廿錢宛 五ノ一 澤田繁次郎 村瀬三郎平  
 金參圓 全 龜井けい 金貳圓四拾錢 全 村瀬文四  
 郎  
 金貳圓六拾錢宛 全 水野茂十 戸田由兵衛  
 金貳圓宛 全 水野梅五郎 新見永三郎 水野利兵衛  
 水野不二太郎 久米鏡太郎 久野由太郎 淺田  
 松太郎 松本半次郎 加藤利八  
 金壹圓貳拾錢 全 水野常吉  
 金壹圓四拾錢 全 水野善三郎  
 金壹圓宛 全 村瀬周次郎 中村良吉 久米卯三郎  
 久米次郎右衛門 松本八重吉 布目政信 柳原三  
 左衛門  
 金八拾錢 全 水野次郎右衛門  
 金六拾錢宛 全 水野桂之助 村瀬彌太郎 村瀬いち  
 松本捨吉 加藤周平  
 金五拾錢 全 久野長之助 金參拾錢 全 水野勇次郎  
 金四拾錢宛 全 水野市太郎 加藤孫太郎 村瀬惣之  
 助 水野光六  
 金廿錢宛 全 久野卯之助 岡田吉次郎 濱島新作 加藤  
 文次郎 水野てつ 村瀬はる 木村末野 佐藤増太郎  
 金拾錢 全 戸田秋太郎



文學博士 三宅雄次郎君序  
大僧正 本多日生師著 (既製發賣)

# 法華經講義

和裝鉄入全八冊 正價金四圓 郵税金三十錢  
洋裝背皮全二冊 臺灣韓二十錢

法華は天地法界の秘藏、世界群籍の帝王、亞細亞文明の中樞、佛教教觀の實歸にして、佛陀觀、宇宙觀、人身觀、教法觀、行法觀、その他教相教義の全般に亘りて之を調整し發揮せるもの、苟も佛教の眞意を知らんと欲せば必ず法華經に來るべき也  
古今東西の法華經觀を網羅し、特に天台と日蓮との創見を發揮して更に新考案の下に佛教の積極的統一主義を闡明したる本書は實に佛教研究の上に現代及未來の光明たらん矣

發行所 東京市淺草區南松山町 統一團  
大賣捌所 東京市京橋區傳南馬町 須原屋

文學士 小林一郎君序  
日宗新報記者 小泉要智君著  
米人ブキ、氏 畫並贊

# 聖日蓮之文學觀

大再評 好再版  
▲菊判美裝二百頁 ▲本年中割引金四十五錢  
▲郵税金八錢  
日蓮文學は鎌倉文學の花なり日蓮文學は人格の活躍也血と涙とを以て染め出されたる大文學也物質文學肉慾文學に飽ける人々は須らく此雄渾壯大なる心願文學に接して心田の枯涸を潤せ

大僧正本多日生師講過  
國友文次郎筆受

# 法華經大觀

洋裝美本 菊版二百餘頁 本年中割引金四拾五錢 郵税金八錢  
○總論 第一章、佛教の實歸 第二章、佛教の二大傾向 ○各論 第一章、佛身觀(一) 第二章、佛身觀(二) 第三章、教法觀 第四章、行法觀 第五章、人身觀 ○第六、法界觀  
發行所 東京市京橋區南傳馬町三ノ五 須原屋書店  
取次所 東京市淺草區南松山町四十五

# 統一

第四百六十六號

性 格	木村義明
身 延 の 月	征川眞應
	阪本日恒
	阪本日恒
目 次	十法界抄講義(第三回)
	阪本日恒
	宗教と社會
	秋葉顯正
	宗門經營理想
	井村恂也
	讀誌餘感
	經王道入
	はしりかき
	木 寸
	報 報
	教學財團叢報